

研究活動報告

List of research activities

(2005年1月1日～2005年12月31日)

ここに収録された題目及びその概要は、学内研究者の発表したもののうち、2005年1月1日より2005年12月31日迄の期間に刊行されたものに限り、論文の性質、発表機関などには一切制限を加えず、すべて規定の用紙で提供された原稿のまま掲載した。なお、掲載順序は、提出順とした。

土屋 基

異なる気候条件下で暮らす女子高校生の「冷え性」と生活状況の検討：土屋 基，鈴木勝彦，井上忠夫，樋口和洋，民族衛生，71(5)：207-218 (2005.9)

寒冷の厳しい地域と比較的温暖な地域の女子高校生474名を対象に「冷え」の自覚を目的変数に，説明変数には身体状況，生活状況，精神状況をとりオッズ比，母比率の差の検定などを行った。その結果「冷え」の愁訴には寒暖の気候条件よりライフスタイルの良否が強く関与していることが確認された。

思春期における冷え性の実態と生活環境および生活状況の検討：土屋 基，井上忠夫，鈴木勝彦，平成14・15年度環境医学研究所プロジェクト研究成果抄録，順天堂医学，50(4)：481, 2004.

近年女子高生は，短いスカート姿，薄着傾向，強い瘦身願望などに加えエアコンの普及もあって，年間を通じて寒冷暴露による影響が懸念される。そこで健康に好ましい生活指導を展開のために彼女らの「冷え」と生活環境及び生活状況との関連を検討した。その結果，足の「冷え」は6割が，また手の「冷え」は4割が自覚しており，手足の両方の「冷え」を自覚している者は4割存在していた。「冷え」を自覚している者は，食の内容や規則性をはじめ生活全般を通じて健康に好ましくない生活状況が多岐にわたって認められ，更に身体面の愁訴，意欲の欠如や情緒の不安定など精神面の愁訴にも関連していることが示唆された。

健康づくり運動教室の評価に関する検討：土屋 基，井上忠夫，鈴木勝彦，竹内敏康，第12回日本健康体力栄養学会講演抄録集，7：2005

短期間に実施した健康づくり運動教室への参加者22名

を対象に，運動実施の効果を検討した。その結果わずか12回の教室開催ではあったが，教室への参加がきっかけとなり，日常生活の中で体を動かそうとする行動が増え，多くの体力要素に向上が認められた。更に参加者同士の交流を配慮した取り組みにより，自主的なサークル活動に発展できることが確認された。

キャンプ実習における高地生活での体組成変化：鈴木勝彦，井上忠夫，土屋 基，清水俊明，竹井謙之，平成14年度特別共同プロ研究成果抄録，順天堂医学，49(4)：532—533, 2004.

“鈴木勝彦”の項参照

高地滞在によるエネルギー代謝と体組成の変化：鈴木勝彦，土屋 基，井上忠夫，清水俊明，竹井謙之，平成14年度特別共同プロ研究成果抄録，順天堂医学，51(3)：412-413, 2005.

“鈴木勝彦”の項参照

綾部 誠也

著 書

高齢者に対する筋力トレーニングとその効果．綾部誠也，田中宏暁．64-70．老年医学 update2005，日本老年医学会編．メディカルビュー社（平成17年6月）高齢者における筋力向上のメカニズム，トレーナビリティならびにその方法について述べた。

体力とその評価．田中宏暁，綾部誠也．16-19．運動療法と運動処方，佐藤祐造編，文光堂（平成17年2月）運動療法の実践に際して有酸素性作業能と下肢筋力の評価法とその意義を述べた。

原著論文

Long-period accelerometer monitoring shows the role of physical activity in overweight and obesity. Yoshioka M, Ayabe M, Yahiro T, Higuchi H, Yoshitake Y, Miyazaki H, Kiyonaga A, Shindo M, Tanaka H. *Int J Obes Relat Metab Disord.* 29, 502-508 (平成17年5月) 多人数の邦人を対象に多メモリ-速度計側装置付歩数計にて、身体活動量を評価し、肥満予防に当たっては、歩数よりも強度別活動時間を改善する事が重要である事を明らかにした。

研究報告書

地域住民の口腔保健と全身的な健康状態の関係についての総合研究. 平成16年度厚生労働科学研究費補助金報告書, 主任研究者小林修平, (平成17年3月)

学会発表

Considerations on the physical activity in hot environment. The 13th International Congress on Occupational Health Services. Ayabe M. and Katamoto S. (平成17年12月)

Age-related changes in an intensity distribution of daily physical activity. Walking for Health: Measurement and Research Issues and Challenges conference. Ayabe M, Yoshioka M, Yahiro T, Higuchi H, Higaki Y, Shindo M, Tanaka H. (平成17年10月)

自立高齢者向けの乳酸性作業閾値の個人差に対応した運動処方作成方法の提案. 第60回日本体力医学会. 綾部誠也, 石井好二郎, 田中宏暁. (平成17年9月)

Pedometer accuracy and intensity distribution of physical activity in younger versus older subjects. 52nd American College of Sports Medicine Annual Meeting. Ayabe M, Takayama K, Ishii K, Kiyonaga A, Shindo M, Tanaka H. (平成17年5月)

Influence of exercise intervention on blood lipid levels, glycometabolism, adipocytokines, and cardiac autonomic function in adolescent females with hidden obesity. Ishii K, Ayabe M, Okabe T, Iwata T, Takayama K, Yamaguchi T. The 8th Asian Federation of Sports Medicine Congress. (平成17年5月)

The pedometer accuracy during the stair ascending and descending. The 8th Asian Federation of Sports Medicine Congress Ayabe M, Ishii K, Sshindo M, Tanaka H. (平成17年5月)

ランナーを対象としたステップ台を用いたトレーニング方法の提案. 第17回ランニング学会大会. 里隆文, 綾部誠也, 進藤宗洋, 田中宏暁. (平成17年4月)

心臓自律神経活動が運動介入による有酸素能力の改善に及ぼす影響. 第6回日本健康支援学会. 高山晃作, 石井好二郎, 佐久間一郎, 綾部誠也, 進藤宗洋, 田中宏暁, 浜田拓, 森谷敏夫. (平成17年2月)

伊藤 政男

[原著論文]

1. 「**体操競技選手における精神性発汗と試合成績との関係**」著者: 伊藤政男, 加納 實, 原田睦巳, 辻川比呂人, 李 春子, 岡田隆夫 *発汗学* Vol. 12 No 1. 2-8, 2005.4

オリンピック・アテネ大会の金メダリストを含む体操競技選手を対象にして、競技会で普段の実力を発揮できた選手とできなかった選手の主観的・客観的な緊張度と、それが身体反応に及ぼす影響を発汗応答の測定、POMS, STAI の質問紙を用いて検討した。

2. 「**器械運動の特性と学習目標に関する研究**」著者: 原田睦巳, 浦井孝夫, 伊藤政男, 加納 實 *体操競技・器械運動研究* No 13. 73-85, 2005.3
“原田睦巳の項参照”

[学会発表]

「**学習指導要領における体育の目標ならびに器械運動の学習目標に関する研究**」原田睦巳, 伊藤政男, 浦井孝夫, 加納 實 *体操競技・器械運動研究* No 13. 118, 2005.3
“原田睦巳の項参照”

[報告書]

「**器械運動の学習目標に関する研究**」浦井孝夫, 伊藤政男, 加納 實, 原田睦巳 *スポーツ健康科学部*, 平成16年度学内共同研究報告書 “浦井孝夫の項参照”

原田 睦巳

[原著論文]

1. 「器械運動の特性と学習目標に関する研究」著者：原田睦巳，浦井孝夫，伊藤政男，加納 實 体操競技・器械運動研究 No 13. 73-85, 2005.3

器械運動の特性を考え，新たに「運動感性」に関わる目標を加えてその達成度合いを調査・検討し，器械運動領域にふさわしい「学習目標」を提言した。

2. 「体操競技選手における精神性発汗と試合成績との関係」著者：伊藤政男，加納 實，原田睦巳，辻川比呂人，李 春子，岡田隆夫 発汗学 Vol. 12 No 1. 2-8, 2005.4

“伊藤政男の項参照”

[学会発表]

1. 「メディカルスタッフとの連携—コーチの立場から—」原田睦巳 スポーツ専門職の役割というテーマのもと，体操競技のコーチの立場から体操競技の競技特性，ドクター・トレーナーの捉え方，障害発生部位などについて発表した。

日本臨床スポーツ医学会誌：Vol. 13 No. 3 298-401. 2005

2. 「学習指導要領における体育の目標ならびに器械運動の学習目標に関する研究」原田睦巳，伊藤政男，浦井孝夫，加納 實 体操競技・器械運動研究 No 13. 118, 2005.3

昭和50年代の学習指導要領から平成10年の学習指導要領改訂に焦点を当て，その変遷と現行の学習指導要領における問題点について検証した。

[報告書]

「器械運動の学習目標に関する研究」浦井孝夫，伊藤政男，加納 實，原田睦巳 スポーツ健康科学部，平成16年度学内共同研究報告書

“浦井孝夫の項参照”

須藤 路子

Acquisition Process of English Rhythmic Patterns: Comparison between Native Speakers of English and Japanese Junior High School Students 著者：須藤路

子，金子育世 JACET Bulletin 40 (大学英語教育学会紀要第40号)，1-14, 2006.

In this study, we observed the acquisition process of English rhythmic patterns by Japanese 7th graders who had started to study English formally in junior high school for a period of one year. In order to compare their productions with those of American speakers, we prepared two different linguistic environments for the Japanese learners, that is, studying in the U.S. and in Japan. The result of the study showed conspicuous differences in the acquisition of rhythm between the two Japanese learners, indicating that the production of weak forms is a significant factor in acquisition.

岩崎 香

〈著書〉

地域生活支援とグループホーム—精神障害者グループホーム運営ハンドブック 第4章入居者の権利保障 第3項 苦情解決の体制 pp 179-186 2005.3

グループホームの運営上，利用者の権利の問題を抜きに語ることはできない。施設内での苦情解決の体制について検討を加えるとともに，その施設の理念，利用者ニーズに応じたクリエイティブな実践としての権利擁護の必要性を論じた。財団法人全国精神障害者家族会連合会 NPO 法人全国精神障害者地域生活支援協議会編。

〈学術論文〉

通院医療と地域処遇における精神保健福祉士の役割 通院・地域処遇マニュアル pp 23-25, 2005.3

心神喪失者等医療観察法施行を前に「通院処遇検討委員会」のディスカッションで課題として挙げられものを選び「総論」として収載したマニュアルの中で，重大な犯罪行為をおこなった精神障害者が専門入院機関からの退院，地域での生活を支援する精神保健福祉士の役割，現状と今後の課題を担当した。通院処遇検討委員会編

社会福祉実践における自己決定へのアクセス—支援の曖昧さの示すもの— 大正大学福祉デザイン研究所障害福祉研究班研究報告書 pp 18-22 2005.3

社会福祉の援助のプロセスは科学的研究で実証しがたい部分を持っている。その曖昧さの中に，支援の個性や特質が潜んでいるのである。しかし，その曖昧な構造の中で，支援者の裁量が働きすぎ，当事者の自己決定が

疎外されること、逆に自己決定を楯に必要な支援を行わないといった現象が起こっている。そうした現実に向き合いながら、実践を実証していくことの必要性について言及した。

コミュニティにおける専門性と市民性の接点 精神障害者の地域ケア思想と支援システムに関する研究 理論編 第6章 pp 78-86 大正大学福祉デザイン研究所障害福祉研究班 研究報告書 pp78-86 2005.3

「地域にソーシャルワーカーはいるのか」という市民活動家の問いから出発し、3人の地域で実践する精神保健福祉士へのインタビュー調査を通じて、専門家と市民の接点を探った。インタビュー調査のまとめとして、活動拠点となるその町の歴史や文化への理解、責任や義務をどれだけ引き受けられるかといったことがコミュニティ・ワークを志向する精神保健福祉士に欠かせない要素であることが明らかとなった。

「個人情報保護法施行」とその後の動向 (岩崎 香 伊藤亜希子)精神保健福祉 Vol. 36 No. 4 2005.12 pp 373-375

2005年4月から2年間の猶予を経て試行された個人情報保護法は本来、医療や福祉分野をターゲットにして成立したものではない。しかし、法対象に含まれてくる事態に各機関ではその対応に追われている。診療情報開示の問題を含め、議論となっている事柄に焦点化して、その動向と課題をまとめた。

東京都内の地域生活支援センターにおける電話相談業務の現状と課題 (岩崎 香 上野容子 永塚恭子他) 東京 PSW 研究13号 2006.3月 掲載予定 約15,000字

2004年9月に、東京都地域生活支援センターへの電話調査に関するアンケート調査を実施した。電話相談は利便性に富んでいるが、受け手としては相手が見えず、ソーシャルワーク関係を築きにくい。利用者が多様化する中で、誤解による攻撃やセクシャル・ハラスメントを受けることも多い実態が明らかとなった。マンパワーが不足している現状の中で、スタッフの孤立化やバーン・アウトを防ぐ必要があり、研修やスーパービジョンはもちろんのこと、職場での日常的な情報共有や相互支援が重要であることについて論じた。

〈学会発表等〉

通院医療と地域処遇における精神保健福祉士の役割

司法精神医療等人材養成研修会—パネルディスカッション「地域処遇をめぐって」(東京) 2005.2

精神保健福祉士協会で実施した重大な犯罪行為をおこなった精神障害者に対するアンケートの結果を踏まえ、これまでの精神保健福祉士の実践経過を報告した。心神喪失者等医療観察法施行後もこれまで同様、現状の地域資源を活用することになるわけであり、個別的な支援は他の利用者と基本的に変るところはない。ただ、犯罪行為が生活する地域で風化しないことから、精神障害であることと、犯罪行為を行った者であるという二重のステイグマに苦しむこととなる当事者の側の問題についても指摘した。

当事者とご家族の権利擁護を考える～どうしてますか？ 判断力が低下した場合の支援～ 第37回全国精神障害者家族会連合会全国大会 (東京) 2005.1

判断能力の低下とはその人の生活や権利にどう影響するのか、どのような社会資源が利用できるのか、また、利用していく際にどういうことに留意するべきなのか、ということについて、具体的な事例を交えて報告した。

日常の中から権利について考える—東京精神保健福祉士協会権利擁護委員会の活動から— (岩崎 香, 山田恭子, 伊藤亜希子他) 第41回日本精神保健福祉士協会全国大会・第4回日本精神保健福祉学会 (広島) 2005.6 (精神保健福祉 Vol. 36 No. 3, p に報告を掲載)

2年前から、東京精神保健福祉士協会権利擁護委員会では事例検討会、事例集作成、研修の主催などの活動を行ってきた。成年後見制度や地域福祉権利擁護事業などの制度活用に留まらない日常的な「権利」の問題に気づいたプロセスと、活動を通して意識化を働きかけてきた成果について発表した。

精神科デイケアにおけるスポーツ・アクティビティの現状と課題—アンケート調査の結果から— (岩崎 香, 広沢正孝, 中村恭子他) 第48回日本病院・地域精神科医学会 (福岡) 2005.10

2005年2月から3月にかけて実施した精神科デイケアのプログラムに関する調査結果を報告した。関東甲信越の精神科デイケア379ヶ所を対象にし、145ヶ所から回答を得た。その結果、スポーツは全てのデイケアでとり入れられており、身体的・精神的な効果のみでなく、社会的機能への効果など、実践の中で、様々な効果が観察されていた。また、年齢やデイケアの規模などにより取り

組むプログラム内容に差異が見られることが明らかになった。しかしながら、その実証的研究は途についたばかりであり、本研究により今後の課題が明確化したとも言える。

浦井 孝夫

[報告書]

「器械運動の学習目標に関する研究」浦井孝夫, 伊藤政男, 加納 實, 原田睦巳 スポーツ健康科学部, 平成16年度学内共同研究報告書

スポーツ・体育系大学生を対象に器械運動の目標, とりわけ運動そのものの目標の達成度合いを調査・検討し, よい体育授業を創造するための知見を得ることを目的とした。

[原著論文]

「器械運動の特性と学習目標に関する研究」著者: 原田睦巳, 浦井孝夫, 伊藤政男, 加納 實 体操競技・器械運動研究 No 13. 73-85, 2005.3

“原田睦巳の項参照”

[学会発表]

「学習指導要領における体育の目標ならびに器械運動の学習目標に関する研究」原田睦巳, 伊藤政男, 浦井孝夫, 加納 実

“原田睦巳の項参照”

廣瀬 伸良

柔道選手の *Trichophyton tonsurans* 感染症について～練習継続に伴う治療と感染予防および感染拡大阻止の事例～ 著者: 廣瀬伸良 講道館編集柔道 76(1): 89-95, 2005.1

近年, 柔道選手を中心に感染が広まる本感染症について現場で問題となる練習継続と並行した治療と感染予防および感染拡大阻止の事例を紹介し, 全国の柔道指導者に対して本感染症の撲滅をめざした対処法を提言した。

大学柔道選手におけるメンタルトレーニング導入前後の競技内容の分析 著者: 前川直也 (大阪産業大学), 菅波盛雄, 飯島正博, 廣瀬伸良, 高橋 進 (関東学園大学), 佐藤博信, 河鱈一彦 (大阪産業大学) 大阪産業大学論集人文科学編115号: 29-40. 2005

本研究はメンタルトレーニングが競技パフォーマンスに与える影響を競技分析により明らかにした。メンタルトレーニング前後の試合を競技分析したところ, 単位時間あたりの試技数, 充分組からの試技数, 組み手主導権獲得, 試技のつながり, 種類が有意に増加した。試合の勝ち負けには有意な差は見られなかったが, 選手の前向きな攻撃姿勢が示唆された。

柔道選手における下肢トレーニングの効果に関する研究 著者: 菅波盛雄 桜庭景植 廣瀬伸良 中村 充 石川拓次 順天堂大学スポーツ健康科学紀要 9: 1-10, 2005.3

菅波盛雄の項 参照

関東地方の皮膚科診療施設における *Trichophyton tonsurans* 感染症の発生状況に関するアンケート調査 著者: 比留間政太郎, 白木祐美, 二瓶 望 (順天堂大学医学部), 廣瀬伸良, 菅波盛雄 日本医真菌学会雑誌 46(2): 93-98. 2005

関東地方の皮膚科診療所504施設で *Trichophyton tonsurans* 感染症の経験は130施設 (25.8%) であり, 累積患者数は707名であった。患者は高校・大学生で72.9%を占め, その96.5%が柔道, レスリングの実践者であり, 家族内感染も認められた。今後の対策が急務であることを明らかにした。

某スポーツ系大学運動部学生における *Trichophyton tonsurans* 感染症の調査 著者: 廣瀬伸良, 白木祐美, 比留間政太郎, 小川秀興 (順天堂大学医学部) 日本医真菌学会雑誌 46(2): 119-124. 2005

海外より格闘技選手を介して日本へ持ち込まれた *Trichophyton tonsurans* 感染症はスポーツを媒体として他競技選手やその家族などに拡大している可能性がある。本調査はスポーツ系大学運動部学生を対象に行なったものであり, 格闘競技部においての本症が集団発生しても早期および定期的な集団検診の実施や医師の治療, 競技指導者による感染防止対策の実践で菌消滅や感染拡大を阻止できる可能性を示唆したものである。

柔道部における *Trichophyton tonsurans* 感染症の対策: 柔道指導現場からの取り組み 著者: 廣瀬伸良, 白木祐美, 比留間政太郎, 小川秀興 (順天堂大学医学部) 日本医真菌学会雑誌 46(Suppl. 2): 97. 2005

Trichophyton tonsurans 感染症に集団感染した大学の柔道

部学生および卒業生延べ54名(大学生26名, 卒業生28名: 2005年4月現在)を対象として, 感染症に関する調査用紙とHairbrush法による頭髪の白癬菌保有の有無を調査し, 検討した. 外国より格闘技選手を介して日本へ持ち込まれた *T. tonsurans* 感染症は, 格闘競技選手やその家族などへ拡大する可能性がある. 本調査では *T. tonsurans* 感染症について十分に啓蒙された柔道部員やその卒業生についてはその治療と感染拡大予防の方向性が示唆されたと考える. しかしながら毎年の新入生に陽性者が存在することから, 本感染症の再感染拡大の危惧もあり, 大学卒業後の検査も含めた *T. tonsurans* 感染症へクラブ(団体)としての取り組みの必要性が示された.

柔道選手における *Trichophyton tonsurans* 感染症の現状と対策 著者: 廣瀬伸良, 菅波盛雄, 石井兼輔(国際武道大学), 射手矢 岬(東京学芸大学), 木村 広(九州工業大学), 川内谷一志(大分工業専門学校), 白木祐美, 比留間政太郎(順天堂大学医学部) 講道館柔道科学研究会紀要第十輯: 87-96 (2005)

本邦において猛威をふるう *Trichophyton tonsurans* 感染症について全国60施設の1397名の柔道選手から検査申請がなされ, hairbrush法による検査と生活様式などの調査を行った. その結果, 184名(13.1%)がプラシ陽性となり, 各団体によってばらつきはあるものの0~57%の範疇で陽性者が確認された. また, 女性に比較して男性のキャリアが多く, 中量級, 軽量級(80kg未満)の選手に陽性者が多く存在したことから, 性別や体重差における柔道スタイルの違いが感染に影響を与えることが示唆された. 今後の検討が重要であると考え.

A Comparative study of judo competitions using hantei and golden score systems 著者: 菅波盛雄, 廣瀬伸良, 中村 充, 齋藤 仁, 林 弘典 武道学研究第38巻第1号: 1-12

菅波盛雄の項 参照

加藤 卓郎

日本の伝統的武術を応用した下肢筋力トレーニングが中高齢者の脚筋力に及ぼす影響(連名者: 熊倉啓祐, 星本正姫, 河合祥雄) 体力科学 54(6): p559 2005.12

高齢者が興味をもち自宅で安全に取り組めるトレーニングとして, 日本の伝統的武術(剣道の移動動作, 空手の型・移動動作)を取り入れたトレーニングを考案し

た. 本プログラムが中高齢者の下肢筋力へ及ぼす影響を明らかにすることを目的とした. その結果, 実践群の収縮期・拡張期血圧, 脚筋力(右脚180度/秒伸展, 最大一歩幅(武藤方式右足, 左足, YMCA方式左足), 20m折り返し歩行)が有意に改善した. 77%, 75%が剣道の素振り, 空手の前屈立ちになじみがあると回答し, 本トレーニングには全員が興味を示した.

星本 正姫

Effects of a calcium channel blocker on cerebral oxygenation during exercise in patients with high blood pressure. Nagayama O, Koike A, Hoshimoto M, Tajima A, Yamaguchi K, Maeda T, Goda A, Oikawa K, Aizawa T, Fu LT, Momose T, Itoh H Circulation Journal 69 (SI): 268, 2005.3

Critical level of cerebral oxygenation during exercise in patients with dilated cardiomyopathy. Tajima A, Koike A, Nagayama O, Maeda T, Yamaguchi K, Hoshimoto M, Goda A, Kato T, Oikawa K, Yamashita T, Sagara K, Aizawa T, Fu LT, Momose T, Itoh H Circulation Journal 69 (SI): 508, 2005.3

脳血管の動脈硬化の程度と運動中の脳酸素状態の関係. 長山 医, 小池 朗, 百瀬敏光, 星本正姫, 田嶋明彦, 山口香織, 前田知子, 松本 亨, 窪園琢郎, 及川恵子, 桐ヶ谷 肇, 相沢忠範, 傅 隆泰, 伊東春樹 日本臨床生理学会 35(2): 113-120, 2005.4

Middle term effects of lifestyle modification program with repeated intervention on dyslipidemia. Hoshimoto M, Koyama Y, Koike A, Kimura Kato Y, Maruyama A, Ohashi R, Naya K, Watanabe M, Kawai S, Takayama S Diabetes 54 (S2): A565, 2005.6

心疾患患者における運動時の心肺機能と脳および骨格筋の酸素状態の関係. 星本正姫, 小池 朗, 長山 医, 田嶋明彦, 前田知子, 山口香織, 合田あゆみ, 及川恵子, 相沢忠範, 傅 隆泰, 伊東春樹 第11回日本心臓リハビリテーション学会抄録集 83 pp, 2005.7

日本の伝統的武術を応用した下肢筋力トレーニングが中高齢者の脚筋力に及ぼす影響. 加藤卓郎, 熊倉啓祐,

星本正姫, 河合祥雄 体力科学 54(6): 559, 2005.9

“加藤卓郎”の頁参照

暑熱環境下スポーツ活動中での後頭部冷却が生体に与える影響—“クールビット™”の冷却が生体に及ぼす影響について—丸山麻子, 櫻庭景植, 星本正姫 体力科学 54(6): 574, 2005.9

“丸山麻子”の頁参照

新入男性社員におけるメタボリックシンドローム(MS)の現状について. 山田樹央, 星本正姫, 丸山麻子, 中澤摩有子, 高山重光 体力科学 54(6): 629, 2005.9

Critical Level of Cerebral Oxygenation during Exercise in Patients with Dilated Cardiomyopathy. Hoshimoto M, Koike A, Tajima A, Nagayama O, Yamaguchi K, Maeda T, Goda A, Aizawa T, Itoh H *Circulation* 112 (17): II-469, 2005.10

Influences of cerebrovascular arteriosclerosis on cerebral oxygenation during exercise. Goda A, Koike A, Nagayama O, Hoshimoto M, Tajima A, Yamaguchi K, Maeda T, Aizawa T, Itoh H *Circulation* 112 (17): II-469, 2005.10

加納 實

[原著論文]

1. 「体操競技選手における精神的発汗と試合成績との関係」著者：伊藤政男, 加納 實, 原田睦巳, 辻川比呂人, 李 春子, 岡田隆夫 発汗学 Vol. 12 No 1. 2-8, 2005.4

“伊藤政男の項参照”

2. 「器械運動の特性と学習目標に関する研究」著者：原田睦巳, 浦井孝夫, 伊藤政男, 加納 實 体操競技・器械運動研究 No 13. 73-85, 2005.3

“原田睦巳の項参照”

[学会発表]

「学習指導要領における体育の目標ならびに器械運動の学習目標に関する研究」第18回日本体操競技・器械運動学会報告 原田睦巳, 伊藤政男, 浦井孝夫, 加納 實 体操競技・器械運動研究 No 13. 118, 2005.3

“原田睦巳の項参照”

[報告書]

「第28回オリンピック・アテネ大会報告」加納 實 機関紙ジュニア体操 42: 2-8, 2005.1

オリンピック発祥の地アテネにて, 28年ぶりに団体優勝を成し遂げた男子体操競技の大会に向けた経緯とこれまでの戦略, そして競技内容について詳細な報告をした。

「器械運動の学習目標に関する研究」浦井孝夫, 伊藤政男, 加納 實, 原田睦巳 スポーツ健康科学部, 平成16年度学内共同研究報告書

“浦井孝夫の項参照”

河合 祥雄

原著

Muscle tension dynamics of isolated frog muscle with application of perpendicular distortion. (連名者 Murayama M, Yoneda T) *European Journal of Applied Physiology*. 93(4): 489-495, 2005.

ダイバーと心脈管系疾患—高齢化への対策—. 日本高気圧環境医学会関東地方会誌 4: 23-26, 2005.

著書

スポーツ中の突然死. 健康とスポーツ—突然死を防ぐために— 順天堂医学部(澤木啓祐, 河合祥雄)編, 99-126, 学生社, 東京.

メディカルチェック—内科—.「健康生活コーディネーター教本」, 千葉県総合企画部戦略プロジェクト推進室, pp1-8, 2005.

慢性心不全の病理・病態生理: 病理. 「慢性心不全」新しい診断と治療のABC33/循環器5, (連名者山田京志), 大阪府, 最新医学社, 21-30, 2005年

たこつぼ心筋障害(たこつぼ心筋症). 北畠 顕, 友池仁暢編「厚生労働省難治性疾患克服研究事業 特発性心筋症調査研究班」心筋症 診断の手引きとその解説, 有限会社かりん社, 札幌, 109-116, 2005年

総説

感染性心内膜炎の発症機序。(連名者: 山田京志),
Heart View 9(3): 313-318, 2005.

リウマチ熱の診断基準/重症度. 内科「特集: 内科疾患の診断基準, 病型分類, 重症度」95(6): 1428-1431, 2005.

病理学的に見た突然死. 日本臨床 63(7): 1141-1148, 2005.

心再灌流障害の病態とメカニズム. LISA12(12): 1236-1239, 2005

その他

たこつぼ型心筋障害の病理組織学的研究. 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 特発性心筋症に関する調査研究班 平成16年度 総括・分担研究報告書 主任研究者 北畠 顕 86-87, 平成17(2005)年3月.

たこつぼ型心筋障害剖検例の検討:(連名者: 鈴木宏昌, 山田京志, 馬渡耕史, 島田俊夫, 長崎真琴, 河田正仁, 中村哲也, 西山信一郎, 松下 央:) 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 特発性心筋症に関する調査研究班 平成16年度 総括・分担研究報告書 主任研究者 北畠 顕 152, 平成17(2005)年3月.

たこつぼ型心筋障害の病理組織学的検討.(連名者: 鈴木宏昌, 山田京志, 馬渡耕史, 島田俊夫, 長崎真琴, 河田正仁, 中村哲也, 西山信一郎, 松下 央, 加藤周司, 磯部光章, 磯部和哉) 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 特発性心筋症に関する調査研究班 平成16年度 総括・分担研究報告書 主任研究者 北畠 顕 187, 平成17(2005)年3月.

たこつぼ型心筋症.(連名者: たこつぼ心筋症(心筋障害)調査研究グループ) 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 特発性心筋症に関する調査研究班 平成14-16年度 総合研究報告書 主任研究者 北畠 顕 98-99, 平成17(2005)年3月

一流陸上競技選手ならびに箱根駅伝選手の卒業後の健

康状態(連名者: 澤木啓祐, 仲村明, 丸井英二). 順天堂医学 21: 420, 2005.

金子 育世

Acquisition Process of English Rhythmic Patterns: Comparison between Native Speakers of English and Japanese Junior High School Students 著者: 須藤路子, 金子育世 JACET Bulletin 40 (大学英語教育学会紀要第40号), 1-14. 2005.

“須藤 路子”の項参照

日本語の音韻素性が喚起するイメージについての実験研究 著者: 川原繁人, 篠原和子, 中山晃, 押田真介, 金子育世, 大館実子, 松中義大 日本認知科学会第22回大会発表論文集 228-229. 2005.7

日本語の音韻素性と「柔らかさ」のイメージがどのように関わっているかを, 2種類の実験をもとに考察した. 実験結果から, 共鳴音は阻害音よりも, 低母音は高母音よりも「柔らかい」というイメージを喚起しうることが示唆された. 今回の実験はオノマトペを対象としたものではないことから, 「音と意味のつながりは Sausure が論じたよりも広範にみられるものである」という主張を支持する根拠が, 日本語のデータから得られた.

大津 一義

著書

江口篤寿編(2005), 新版 学校保健 補訂, 第1版第3刷, 医歯薬出版, 159-174(第6章), 253-267(第10章), 第6章「組織的な学校保健活動」では学校保健安全計画・学校保健関係職員の役割・学校保健委員会の活動, 第10章「学校保健と地域保健」では連携の意義・地域保健の動向・保健行政・地域の保健資源・連携を促進するうえでの課題について, 新しい知見を加えて論じた.

大津一義編(2005), たのしいほけん 3・4年, 大日本図書, 「毎日の生活とけんこう」と「育ちゆく体とわたし」の2つの大単元の編集と校閲に当たった.

大津一義編(2005), たのしいほけん 5・6年, 大日本図書, 「けがの防止」, 「心の健康」, 「病気の予防」の3つの大単元の編集と校閲に当たった.

高石昌弘編 (2005), 新版 中学校 保健体育, 大日本図書, 73-93, 「障害の防止」の単元を担当し, 障害の発生, 交通事故による障害の防止, 自然災害, 応急手当について言及した。

雑誌

大津一義 (2005), 生き甲斐へのアプローチ, consensus community, vol. 17, 2-3, 人々の健康づくりにあたっては「環境づくり」と「主体づくり」の相俟ったアプローチが必要であり, 後者は健康教育に負うところが大きい。これからの健康教育は知識だけでなく心に働きかけ, 生き甲斐 (QOL) を高めることが大切であり, その役割を担う健康教育の専門家の育成が急務であることについて言及した。

学会発表

「生活習慣改善に対する子どもの意志決定に関する研究」平成16年11月, 日本学校保健学会誌 Vol. 46 Suppl, 262-263, 山田浩平, 白石孝久, 前上里直, 小野かつき, 大津一義

子どもが生活習慣を改善するための適切な意志決定の方法を検討したところ, 意志決定時の自信を高めてストレスを減らし, 「熟慮型」の対処パターンをとるようにする必要性が明らかとなった。

「喫煙授業における情意形成過程に関する研究」, 平成16年11月, 日本学校保健学会誌 Vol. 46 Suppl, 194-195, 前上里直, 大津一義, 山田浩平, 小野かつき, 白石孝久

「喫煙が身体に及ぼす害」についての講義を行い, 講義の流れに応じて学生の情意がどのように形成されるかを検討したところ, 非喫煙者は喫煙者よりも高次の認知的態度, 行動的態度が形成されていることが明らかとなった。

「かぜの原因と予防に関する認識調査」, 平成16年11月, 日本学校保健学会誌 Vol. 46 Suppl, 274-275 小野かつき, 前上里直, 山田浩平, 白石孝久, 大津一義

「病気の予防」に注目し, その教育内容の編成について検討したところ, シークエンスとしては疾病の原因と予防の科学史を踏まえて, 病気の原因, 次いで予防法を学習する必要性が明らかとなった。

「小学校低学年における性被害防止教育の進め方」

平成16年11月, 日本学校保健学会誌 Vol. 46 Suppl, 360-361, 田村志伸, 矢吹理恵, 大津一義

小学校低学年の児童を対象に, 性被害から身を守るための意思決定能力を培うための授業の進め方について検討したところ, いか・の・お・す・し (ついていけない, 車にのらない, おおごえを出す, すぐ逃げる, しらせる) を基本に認知的態度と行動的態度を形成していくことの重要性が示唆された。

「大学生の意思決定に関する研究」, 平成16年12月, 第8回 千葉県学校保健学会講演集, 29-30, 山田浩平, 小野かつき, 前上里直, 白石孝久, 大津一義

大学生が生活習慣を改善するための適切な意志決定の方法を検討したところ, 意志決定時の自信を高めてストレスを減らし, 「熟慮型」の対処パターンをとるようにする必要性が明らかとなった。

「意志決定スキル形成のための学習指導過程のあり方」平成17年8月, 日本健康教育学会誌 Vol. 13, Suppl, 190-191, 山田浩平, 小野かつき, 前上里直, 白石孝久, 大津一義

間食を適切に取るための意志決定スキル形成に有効な学習指導過程を検討したところ, ライフスキルの一般的基本的な5つの形成過程を基盤にし, このうちの教示, 模倣, 練習過程に Simon (H, A) の意志決定プロセスを導入した学習指導過程を経る必要性が明らかとなった。

「望まない妊娠を予防するための意志決定の講義における大学生の情意形成過程に関する研究」平成17年12月, 第9回 千葉県学校保健学会講演集, 26-27, 前上里直, 山田浩平, 小野かつき, 白石孝久, 大津一義

健康教育の目標領域の1つである情意形成に注目し, その形成過程を, 望まない妊娠を予防するための意志決定要因との関連を通して明らかにしたところ, 講義内において感情的態度→認知的態度→行動的態度の形成に至った者は意志決定時の自信が高く, ストレスが少なく, 「熟慮型」であり, 望まない妊娠の予防行動を引き起こす可能性が示唆された。

澤木 啓祐

長距離走のパフォーマンスに及ぼすバウンディングの有効性 著者: 仲村 明・越川一起・吉儀 宏・澤木啓祐, 陸上競技研究 60号(1): 18-23 (2005.3)

仲村明の項参照

(学会講演)

スポーツ医学にみるからだづくり健康づくり

箱根駅伝, アテネオリンピックおよび全日本バレーボールチームへの科学的アプローチとアクシデントの改善策を発表し, 最高のパフォーマンスを発揮するためには体力や技術を高めるとともに傷害, 疾病など予防し, トレーニング効果を高めるための様々な工夫を述べた. サントリー健康フォーラム (2005.5)

アスタキサンチンスポーツパフォーマンスに及ぼす影響: 学会設立における特別講演

アスタキサンチンの摂取がアスリートの視機能及び持久性運動における疲労回復にどのような影響を与えるかを実験結果をもとにして報告した. アスタキサンチン学会 (2005.7)

長距離走におけるアクシデントとその対応策

各種ロードレースにおけるアクシデントにより事例報告をもとに原因追究ならびに改善策を発表した. 競技会トレーニング現場において医療連携が必要であり現場における医療チームのサポート必要性を訴えた. 順天堂医学会 (2005.9)

スポーツ医学の応用と一貫指導システム: 日本陸上競技学会第4回大会抄録集: 12 (2005.9)

競技力向上のための生理・生化学的研究の現在・過去・未来について, 順天堂大学の実践例を紹介し, 国際的競技力向上のためのコーチング現場における医科学データの応用について基調講演をおこなった.

中国地域スポーツサミット2005

総合型地域スポーツクラブの立ち上げ運営の関して西ドイツゴールデンプランならびに日本型地域スポーツクラブの先駆けであった習志野市民クラブの挑戦と挫折などの原因についての報告を行った. (2005.11)

スポーツ科学最前線「高地トレーニングを考える」陸上競技の立場から: 第2回順天堂大学スポーツ健康科学部国際シンポジウム抄録集: 23 (2005.12)

トップ選手において現在主流となっている3週間以上のロングタームの高地トレーニングと, 1週間程度のコンディショニング高地トレーニングの例を紹介し, 競技

者の個人差はもちろんのことトレーニングプログラム, 実施期間, 栄養等の影響を踏まえた高地トレーニングの重要性を述べた.

(学会発表)

ラクトフェリン摂取が長距離ランナーの運動性貧血の改善に及ぼす効果: 鯉川なつえ・仲村 明・長岡 功・山口正弘・澤木啓祐・山内恒治・濱野弘一, 日本陸上競技学会第4回大会抄録集: 26 (2005.9)

鯉川なつえの項参照

長距離走におけるレース前のスピード刺激練習に関する研究—実施日および走スピードについての検討— 伊田一平, 金子今朝秋, 吉儀 宏, 澤木啓祐, 日本陸上競技学会第4回大会抄録集: 33 (2005.9)

伊田一平の項参照

女子長距離ランナーの潜在的な運動性貧血に対するラクトフェリン摂取の有用性: 鯉川なつえ・仲村 明・長岡 功・山口正弘・澤木啓祐・山内恒治・濱野弘一, 第16回日本臨床スポーツ医学会学術集会抄録集 13 (4): 122 (2005.11)

鯉川なつえの項参照

鯉川なつえ

フラバンジェノールの有用性とスポーツ現場での活用
著者: 鯉川なつえ・飯野妙子, New Food Industry 47 (1): 22-28 (2005.1)

フラバンジェノールのさまざまな有用性を総説するとともに, スポーツ選手を対象にフラバンジェノールを継続的に摂取させた結果, 走運動負荷により筋肉から血液中に逸脱するLDHやCPKの酵素量が有意に抑制され, 血中乳酸も有意に減少を示したことからフラバンジェノールがスポーツ現場においても有効である可能性を示唆した.

(学会発表)

ラクトフェリン摂取が長距離ランナーの運動性貧血の改善に及ぼす効果: 鯉川なつえ・仲村 明・長岡 功・山口正弘・澤木啓祐・山内恒治・濱野弘一, 日本陸上競技学会第4回大会抄録集: 26 (2005.9)

長距離ランナーに鉄結合タンパク質であるラクトフェリンと鉄剤を摂取させ, 血液生化学データを検証した結

果, MCV および MCH が有意に高まった. また, 非摂取群は Fe, フェリチン, RBC が有意に減少したが摂取群に変化はみられなかったことから, 長距離ランナーの運動性貧血の予防改善には鉄剤に加えラクトフェリンを同時に摂取することが有効であると考えられた.

女子長距離ランナーの潜在的な運動性貧血に対するラクトフェリン摂取の有用性: 鯉川なつえ・仲村 明・長岡 功・山口正弘・澤木啓祐・山内恒治・濱野弘一, 第16回日本臨床スポーツ医学会学術集会抄録集 13(4): 122 (2005.11)

鉄吸収調整作用を有するラクトフェリンを, 潜在的に運動性貧血を発症しやすい女子長距離ランナーに摂取させ, 血液生化学データと運動パフォーマンスの変化について検討した結果, 貧血傾向を示す RBC, Fe, フェリチンの減少を抑制した. また非摂取群は運動パフォーマンスが低下したが摂取群は変化しなかった. このことからラクトフェリンは運動性貧血を予防改善効果が期待された.

細見 修

【学会発表】

サイログロブリンや脱シアル化サイログロブリンの β -GalNAc 構造: ヒトとウシヤブタとの違い 竹屋 章 (聖マリ医大), 細見 修 (順天大), 鷲 盛久 (聖マリ医大), 坂田憲昭 (聖マリ医大), 早川秀幸 (聖マリ医大), 竹下裕史 (聖マリ医大), 佐々木千寿子 (聖マリ医大), 一場一江 (聖マリ医大), 向井敬二 (聖マリ医大), 日本法医学会, 2005.4.

ヒトのサイログロブリン (Tg) に GalNAc 結合性とされる数種類のレクチンが結合すること, およびレクチン結合部位の多くが連鎖球菌の β -Galase 感受性であることを明らかにしてきた. ヒト Tg の WFL レクチン結合部位の一部が β -Galase 抵抗性を示し, その大部分が β -HeNAcase 感受性で, 今まで報告がない β -GalNAc 構造を持っていた.

Study on the Synthesis of Oligosaccharide(s) by Reverse Reaction of Glycosidase from Lactic Acid Bacteria H. Toko (Juntendo Univ.), K. Ishigaki (Juntendo Univ.), M. Nakata (Juntendo Univ.), K. Ikeda (Juntendo Univ.), Y. Misawa (Yaizu Suisankagaku Industry Co., LTD), Y. Matahira (Yaizu Suisankagaku Industry

Co., LTD), A. Takeya (St. Marianna Medical Univ.), O. Hosomi (Juntendo Univ.), Chitin Chitosan Res., 11(2), 200, 2005.6.

The purpose of this study is to obtain information regarding the novel oligosaccharide synthesis pathway in yoghurt by reverse reaction of lactic acid bacteria glycosidase and inhibitory effect of their oligosaccharides on human cancer cell proliferation. We added glucosamine (5 % concentration) and lactic acid bacteria into bovine milk (1 L), and incubated at 37°C for 24-48 hr. After centrifugation of the yoghurt and fractionation to the supernatant and precipitation, the supernatant was examined about effect on the human cancer cell proliferation. The results showed that the supernatant contained saccharide(s) which had inhibitory effect on cancer cell proliferation. However, as yet it is remained to solve what kind of saccharide is synthesized in the yoghurt.

Molecular Study on Melibiosamine (Gal α 1-6GlcNH $_2$) Receptor of Human Leukemia Cell Authors: O. Hosomi (Juntendo Univ.), Y. Misawa (Yaizu-Suisan-Kagakukougyou), Y. matahira (Yaizu-Suisan-Kagakukougyou), N. Uzuka (Yaizu-Suisan-Kagakukougyou), A. Takeya (St. Marianna Medical Univ.), Y. Kubohara (Inst. for Molecular Regulation, Gunma Univ.), K. Sugahara (Utsunomiya Univ.), S. Kudo (Gunma Univ.), Chitin Chitosan Res., 11(2), 138-139, 2005.6.

In the previous symposium we have reported the inhibitory effect of novel oligosaccharide(s) containing glucosamine (GlcNH $_2$) on the proliferation of human leukemia cells (K562 and BALL). We report here that melibiosamine (MelNH $_2$, Gal α 1-6GlcNH $_2$) receptor molecules are isolated from K562 cells by the affinity chromatography using melibiose-conjugated agarose column and that they are different from human anti- α Gal IgG antibody and α -galactosidase on SDS-PAGE and Western blot. We suppose the MelNH $_2$ receptor molecules to be one of the galectin family and/or unknown molecule(s).

【国際シンポジウム】

Effect of astaxanthin on the oxidative damage of DNA, protein and lipid peroxidation in young and old rats Y. Iida (Toyo Koso Kagaku Co., LTD), T. Shimada (Toyo Koso Kagaku Co., LTD), H. Naito (Juntendo Univ.), K. Uchida (Juntendo Univ.), O. Hosomi (Juntendo Univ.),

K. Ikeda (Juntendo Univ.), F. Yamakura (Juntendo Univ.), M. Tsukada (Juntendo Univ.), D. Ohmori (Juntendo Univ.), Abstract for PacifiChem (Hawaii), 2005. 12.

Astaxanthin is one of the carotenoids present in marine animals, vegetables and fruits. Compared to β -carotene, it was two additional oxygenate groups on each ring structure that gives it a deep red color and crowns it as elite xanthophyll. These extra functional groups give astaxanthin extraordinary antioxidant capability and properties unlike other carotenoids. The beneficial antioxidant effects have been demonstrated *in vitro*, but only to a limited degree *in vivo*. We investigated the effect of dietary supplementation with astaxanthin on oxidative damage in young and old rats. Protei carbonyls were attenuated by astaxanthin in the heart, liver and kidneys. A remarkable effects were observed in a kidney of an old rat. Urinary 8-OHdG levels were also attenuated by astaxanthin in old rats, but not in young rats. On the other hand, no significant changes were observed about TBARS. These results indicate that astaxanthin is likely to protect biomolecules from oxidative damage *in vivo*.

Novel Oligosaccharides have Inhibitory Activities on Proliferations of Human Leukemia Cells O. Hosomi (Juntendo Univ.), Y. Kumaki (Chemokine Pharmaceutical, Inc.), Y. Misawa (Yaizu-Suisan-Kagakukougyou), N. Uzuka (Yaizu-Suisan-Kagakukougyou), Y. Matahira (Yaizu-Suisan-Kagakukougyou), A. Takeya (St. Mariana Medical Univ.), Y. Kubohara (Inst. for Molecular Regulation, Gunma Univ.), K. Sugahara (Utsunomiya Univ.), S. Kudo (Gunma Univ.), Glycoconjugate Journal, 22(4/5/6) 323-324, 2005.9.

It has been reported that glucosamine (GlcNH₂) is distributed in connective and cartilage tissues of human and other animals. It is well known that this amino sugar is a precursor substance of glycosaminoglycans, and it has suppression activity of nitric oxide synthesis and reparation effect of arthrodial cartilage such as osteoarthritis. Thus applications of glucosamine are noticed for drugs and foods. We report here that novel oligosaccharides containing GlcNH₂ inhibit the proliferation of human leukemia K562 and BALL cell but not human normal umbilical cord fibroblast (HUC-F2) suggesting that human leukemia cell has unique receptor for novel oligosaccharides. Lactosamine, al-

lolactosamine, N-acetylmelibiosamine, melibiosamine (MelNH₂), galactosyl-N-acetylactosamine and galactosylactosamine were synthesized by reverse reactions of α - and β -galactosidases of bacteria, and FITC-labeled melibiosamine (MelNH-FITC) was synthesized. Each cell suspension (0.36 ml) of K562, BALL and HUC-F2 (about 4.5 ~ 8.8 × 10⁴ cells/ml) was added to a 24 well plate, and incubated with 1-10 mM saccharides for 3-4 days. Cell counts were done using a hemocytometer. Cells were stained by Cellstain Hoechst 33258 (H33258) for apoptosis and by MelNH-FITC. It was observed that novel oligosaccharide had inhibitory activities on leukemia cell proliferations, and that the apoptosis of K562 cell was induced by addition of MelNH₂. When MelNH-FITC was added to the control K562 cell culture, the cells were not stained, but wounded or dead cells by addition of MelNH₂ were stained. It is suggested that the K562 cell has a unique and important receptor for MelNH₂ and MelNH-FITC.

【資料】

【公開特許】新規な二糖類, それを含有する組成物及びその製造方法: 細見 修 (順天堂大学), 三澤義知 (焼津水産化学工業), 菊地数見 (焼津水産化学工業), 2004-352672

Gal α 1-6GlcNH₂に代表されるアミノ糖である glucosamine を含有する二糖類を melibiose を糖分解酵素の基質として, また糖受容体に glucosamine を用いて特異的な糖分解酵素の逆反応によって新規なオリゴ糖の合成方法を開発した. 糖分解酵素の基質を lactose にすることで, Ga-GlcNH₂ や Gal-Gal-GlcNH₂ のような二, 三糖類の合成方法も開発した. これらの新規なオリゴ糖類は還元末端に glucosamine を有することと非還元末端に中性糖を有することで, オリゴ糖が生体内で特異的な機能を示す可能性を示唆した.

【公開特許】抗癌剤及びそれを有する飲食品: 細見 修 (順天堂大学), 三澤義知 (焼津水産化学工業), 菊地数見 (焼津水産化学工業), 2004-352673

酵素学的に新規合成したオリゴ糖類の中で, メリビオサミン (melibiosamine) は Gal α 1-6GlcNH₂ の構造を有し, ヒト由来の培養白血病細胞の増殖を強く抑制することを発見したものである. さらに, 同様の構成糖類からなるオリゴ糖類も他のガン細胞の増殖を抑制することを見出した. これらは天然に存在する食用植物や動物に含

まれる糖類から構成されるところから、飲食品への利用が可能であることを示唆した。

信太 直己

[原著論文]

1. 高齢者調査にみる健康意識と生活習慣改善の重要性—セルフケアと自己決定の視座を踏まえて— 著者：河原直人，信太直己，町田和彦 Geriatric Medicine 40 (1), 1205-1208

要旨：埼玉県で行なった高齢者健康調査の結果の報告。そして、その結果からセルフケアの重要性を述べた。

2. 血中の銅・アミノ酸錯体の過酸化脂質生成における影響 著者：井上節子，長岡 功（医学部），中島 滋（文京大），池田啓一（医学部），山倉文幸（医学部），信太直己，岩井秀明 Biomed Res Trace Elements 16(1): 50-59

要旨：岩井の項参照

[国際学会発表]

1. Bioactivities of ginseng extracts treated with recombinant Bifidobacterium β -glucosidase (高麗人参の高利用度，高付加価値に関する研究) Authors: S. Nakamura (Shimane Univ.), H. Jig (Shimane Univ.), M. Endo (Shimane Univ.), N. shida, H. Iwai The 96th American Oil Chemists Society (Salt lake city, USA) May 3ed

要旨：岩井の項参照

[国内学会・研究会発表]

1. イソフラボンの抗癌作用の検討 連名者：信太直己，中村宗一郎（島根大），大道正義（千葉県環境保健研究所），井上節子，池田啓一（医学部），町田和彦（早稲田大）岩井秀明 第75回日本衛生学会総会

要旨：イソフラボン成分のゲニスチンが MEL 細胞の分化を促進することが確認された。また，同じくイソフラボン成分のグリステインに抗酸化作用があることが分かった。

2. 運動が血液中の銅濃度，SOD 活性に与える影響 著者：井上 節子，石原 恵（文京大），古田 佐織（文京大），信太 直己，岩井 秀明 第75回日本衛生学会総会

要旨：岩井の項参照

3. 高齢者のライフスタイルおよび身体機能が医療費に及ぼす影響 連名者：河原直人，信太直己，町田和彦

第64回日本公衆衛生学会総会

要旨：アンケート，身体検査，レセプト調査を行い生活習慣や身体検査結果の違いによる医療費の差異を調べた。睡眠時間が少ない人，好中球機能が悪い人は医療費が高くなるという結果になった。

4. 6-ニトロトリプトファン残基特異的抗体の精製とそのパーオキシナイトライト処理 PC12 細胞への応用 連名者：池田啓一（環境医学研），平岡行博（松本歯科大学），岩井秀明，松本 孝（昭和女子大），信太直己，高森健二（環境医学研），山倉文幸（医学部）日本トリプトファン研究会第28回学術集会

要旨：岩井の項参照

中村 恭子

<論文>

ダンス領域内の種目採択に影響を及ぼす要因の検討—創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較— 著者：中村恭子，浦井孝夫 順天堂大学スポーツ健康科学研究 9, 11-20, 2005.3

中学校のダンス担当教員を対象とした意識調査の結果，ダンス領域の種目として創作ダンスもしくは現代的なリズムのダンスを採択しようとする教員の判断に影響を及ぼす要因は，教員の性別や年齢，指導暦などとの関係はなく，個々の教員が「踊る」学習と「創る」学習のいずれを重視するか，教育効果（学習態度および人間形成）と生徒の興味・関心のいずれを重視するかという価値観の違いに帰するとの結論を得た。

中学校における体育の種目選択性に関する研究—ダンス領域を中心とした現状と問題点— 著者：中村恭子，浦井孝夫 順天堂大学スポーツ健康科学研究 9, 52-56, 2005.3

実態調査の結果，学習指導要領改定による体育の種目選択性の拡大の影響から，中学校のダンス授業は学校選択により実施率が約80%に低下したが，生徒による種目選択性実施率は低く，ダンスは依然として女子の必修種目として実施されていることが明らかになった。また，ダンス種目数の増加と領域内種目選択性導入の影響から，各校の実施ダンス種目は多様になり，新種目の現代的なリズムのダンスは半数以上の学校で実施されるようになったが，教材研究・指導法研究の不備が問題点として指摘された。

高齢者の体力と健康意識—高齢者体力テストの関連から— 著者：丸山裕司，古川理志，中村恭子，武井正子
順天堂大学スポーツ健康科学研究 9, 48-51, 2005.3

老人クラブ研修会に参加した65歳から87歳の男女27名を対象として体力テストおよび意識調査を実施した結果，男性は主観的健康状態，リーダーシップの程度，1週間の外出の頻度，行きたい場所にいける自信の各意識調査項目の得点と実際の体力測定との総合得点が統計的に有意に関連していると認められた．女性は体力レベルについての自己評価のみが実際の体力得点に統計的に有意に関連していた．

〈学会発表等〉

創造的芸術経験としてのダンス学習—授業研究グループの歩み— 著者：島内敏子（日本女子体育大学），中村恭子 日本女子体育連盟創立50周年記念フォーラム—第38回全国女子体育研究大会—（東京）記念紀要，60-67, 2005.2

戦後の学校体育に導入された創作ダンスの学習指導法として開発された「課題学習」（松本1981）について，その研究開発・提案の経緯，松本千代栄の舞踊理論，および共同研究組織として機能した日本女子体育連盟・授業研究グループの果たした役割について概観した。「課題学習」は松本の舞踊理論に基づきながら，授業研究グループの実践実証により確かな指導法として確立・発展した．

C. Matsumoto's Achievements and Dance Education

Toshiko Shimauchi (Japan Women's College of Physical Education, JAPAN), Kyoko Nakamura 16th International Association of Physical Education and Sports for Girls and Women (Edmonton, Canada) 2005. 8

C. Matsumoto proposed unique basic study and a learning method based on a study as a pioneer in the study of dance learning as a creative art experience in Japan and acted as a leading figure of the groups she had organized, thus exerting tremendous influence on dance study in Japan.

精神科デイケアにおけるスポーツアクティビティーの現状と課題—アンケート調査の結果から— 著者：岩崎香，広澤正孝，中村恭子，古川育美，羽鳥乃路（東京武蔵野病院）第48回日本病院・地域精神医学会総会（福岡）プログラム・抄録集，92, 2005.10

岩崎香の項参照．

ダンスの学習目標・学習内容と学習成果の検討—創作ダンスと現代的なリズムのダンスについて— 著者：中村恭子，浦井孝夫 日本体育学会第56回大会（筑波）予稿集，384, 2005.11

創作ダンスまたは現代的なリズムのダンスを履修した高校生を対象とした意識調査の結果，現代的なリズムのダンスの学習成果は踊る楽しさの体験と運動技能習得に限定されていたのに対し，創作ダンスは踊る楽しさに加え，自己表現の喜びやグループ内の協力・交流，他者理解，課題解決能力の育成など，多面的な成果が得られたことが確認された．

〈専門誌〉

課題学習の汎用性と指導のポイント～教員養成プログラムに対する学生の反応から～ 女子体育 47: 4, 44-47, 2005.4

創作ダンス課題学習の学習理論は現代的なリズムのダンスの指導にも活用できる汎用性があること，保健体育科教員養成プログラムとして大変有効であることを学生の感想から考察した．

ノって踊ろう『日本の民踊』～タテノリ系とヨコノリ系～ 女子体育47: 7・8, 78-81, 2005.7

日本の民踊はその発生の経緯により念仏踊り系と風流系があり，前者を垂直方向の弾む動きでリズムを取るタテノリ系，後者を水平方向の回転する動きでリズムを取るヨコノリ系としてそれぞれの特徴を解説した．

柳田 美子

学会発表

大学男子ハンドボール選手の基礎代謝量と食事摂取状況，柳田美子，増田美穂子：栄養学雑誌 Vol. 63(5), 368, 2005. 9

大学男子ハンドボール選手を対象に夏期合宿中に基礎代謝量，タイムスタディ，3日間の食事調査等を行った．基礎代謝量は最も少ない者で1580 kcal，多い者で2370 kcalであった．合宿時のトレーニング時間は1日5-6時間であり，1日に必要なエネルギー平均量はおよそ4000 kcalであった．

研究報告

豆乳の摂取が女子長距離ランナーの骨塩量および女性ホルモンに及ぼす効果，鯉川なつえ，柳田美子，宮崎亮

一郎, 澤木啓祐: デザントスポーツ科学 Vol. 26, 220-228, 2005.6

大学女子長距離ランナーを対象に8週間にわたり, 豆乳を摂取してもらったところ, 骨塩量の増加とエストロジオールの増加傾向が認められた。

雑 誌

用語解説 体力年齢, 柳田美子: みんなのスポーツ, No 313, 23, 2005.5

「体力年齢」についての用語を解説したものである。体力年齢とは実際の暦年とは異なり, 体力面から見た年齢を判断するものである。

卯田 一平

(学会発表)

長距離走におけるレース前のスピード刺激練習に関する研究—実施日および走スピードについての検討—: 卯田 一平・金子今朝秋・吉儀 宏・澤木 啓祐, 日本陸上競技学会第4回大会抄録集: 33(2005.9)

長距離走を専門とする競技者を対象として, スピード刺激練習の実施方法の差異が競技成績に及ぼす影響について検討した。実施日をタイムトライアル1日前と2日前の2通りとし, 競技成績を比較したが, 有意な差はみられなかった。また, 走スピードをレースペースの100%と105%の2通りとし, 競技成績を比較したが, 有意な差はみられなかった。以上の結果から, スピード刺激練習は各競技者に応じた内容で行うことが重要であると考えられた。

仲村 明

長距離走のパフォーマンスに及ぼすバウンディングの有効性 著者: 仲村 明・越川一起・吉儀 宏・澤木啓祐, 陸上競技研究60号(1): 18-23 (2005.3)

長距離走者に対して, 補助トレーニングとしてのバウンディングを実施させ前後の3000 m タイムトライアルの成績を比較検討した結果, 記録向上との関連性が推察された。また, 脚筋力やパワーの能力も改善され, バウンディングはコーチング現場において有効なトレーニング手段となると考えられた。

(学会発表)

ラクトフェリン摂取が長距離ランナーの運動性貧血の

改善に及ぼす効果: 鯉川なつえ・仲村 明・長岡 功・山口正弘・澤木啓祐・山内恒治・濱野弘一, 日本陸上競技学会第4回大会抄録集: 26(2005.9)

鯉川の項参照

女子長距離ランナーの潜在的な運動性貧血に対するラクトフェリン摂取の有用性: 鯉川なつえ・仲村 明・長岡 功・山口正弘・澤木啓祐・山内恒治・濱野弘一, 第16回日本臨床スポーツ医学会学術集会抄録集 13(4): 122 (2005.11)

鯉川の項参照

岩井 秀明

[原著論文]

1. 血中の銅・アミノ酸錯体の過酸化脂質生成における影響 著者: 井上節子, 長岡 功 (医学部), 中島 滋 (文京大), 池田啓一 (医学部), 山倉文幸 (医学部), 信太直己, 岩井秀明 Biomed Res Trace Elements 16(1): 50-59, 2005

要旨: 過酸化脂質は動脈硬化等の疾病の原因と考えられており, 血清中の脂質が銅イオン等の金属イオンの働きにより酸化され形成される。銅や蛋白質の摂取量の異なる人を対象に, 血清中の銅, アミノ酸濃度を測定し, その濃度の違いが, 銅イオンの複合体の平衡にどのような変化を与えるのか, 又その複合体の変化が, 過酸化脂質生成にどのような影響を与えるかについて検討した。

2. 栄養摂取, 運動による銅平衡の変化と過酸化脂質の生成 著者: 井上節子, 長岡 功 (医学部), 石原 恵 (文京大), 古田佐織 (文京大), 中島 滋 (文京大) 岩井秀明 体力・栄養・免疫学雑誌 15(1), 28-37, 2005

要旨: 19~20歳の女性を被験者として, 短時間の急激な運動の前後に採血を行ない血液中銅濃度, 過酸化脂質濃度, ヘマトクリット値, SOD 活性値の測定を行なった。運動後は血清及び血球中銅濃度, ヘマトクリット値が高くなり, SOD 活性値も増加したが, 過酸化脂質濃度は増加しなかった。運動後に血球で増加した銅が SOD の前駆体に働き, SOD 活性を上昇させ, 活性酸素を消去し脂質の酸化を抑制したと考えられた。

[国際学会発表]

1. Bioactivities of ginseng extracts treated with recombinant Bifidobacterium β -glucosidase (高麗人参抽出物の Bifidobacterium 由来組み換え β -glucosidase 処理に

よる生理活性) Authors: S. Nakamura (Shimane Univ.), H. Jig (Shimane Univ.), M. Endo (Shimane Univ.), N. Shida, H. Iwai, The 96th American Oil Chemists Society (Salt lake city, USA), May 3rd 2005

要旨: 高麗人参はこれまで根の部分だけが利用されてきたが, 根以外の部分にもジンセノサイドなどの生理活性成分が含まれていることが推測される。そこで根, 茎, 葉及び実からジンセノサイドを含む抽出液を調整し, 得られた抽出物を *Bifidobacterium* 由来組み換え β -glucosidase で処理し, その生理活性を MC3T3-E1, MEL, PC12, HL-60及び M1 細胞を用いて調べた。処理によって得られた脱糖化アグリコン化合物に新規な生理活性が見られたので, 今後は有効成分の分離同定を試み, 新規な健康食品素材としての応用の可能性を探る。

[国内学会・研究会発表他]

1. 酸欠—その恐ろしさと対策 順天堂大学医師会「第16回産業医研修会」

要旨: 視聴覚教材による実地研修, 順天堂大学受講者へのビデオ供覧, 設問, 解説, 質疑応答を行った。2005年3月26日

2. 遺伝子抽出キットと biosafety 管理 連名者: 大道正義 (千葉県環境保健研究所), 吉田菊善 (仙台市衛生研究所), 鈴木信夫 (千葉大学大学院医学研究院), 今井常彦 (東邦大学医学部), 岩井秀明 第75回日本衛生学会総会 日本衛生学雑誌 60(2), P280, 2005

要旨: 抽出用キットが市販されるようになったことで, RNA や DNA を抽出する手順が簡略化された。それにより, 一部の研究者にモラルハザードが内在することとなった。シンガポール, 中国, 台湾での, 研究者への SARS ウィルス感染はその結果であろう。これらの事後措置について報告した。

3. イソフラボンの抗癌作用の検討 連名者: 信太直己, 中村宗一郎 (島根大), 大道正義 (千葉県環境保健研究所), 井上節子, 池田啓一 (医学部), 町田和彦 (早稲田大) 岩井秀明 第75回日本衛生学会総会 日本衛生学雑誌 60(2), P119, 2005

要旨: 信太の項参照

4. 運動が血液中の銅濃度, SOD 活性に与える影響 著者: 井上節子, 石原 恵 (文京大), 古田佐織 (文京大), 信太直己, 岩井秀明 第75回日本衛生学会総会 日本衛生学雑誌 60(2), P199, 2005

要旨: 運動を行なった時, 栄養摂取, 生活活動の違いが血液中の過酸化脂質濃度, 銅濃度, SOD 活性値に影

響するかについて検討した。低栄養摂取の人は運動によって血清銅濃度, 過酸化脂質濃度が上昇し, SOD 活性値が減少している可能性が示唆された。

5. タンパク質中の 6-ニトロトリプトファン残基のイムノプロット法による検出 連名者: 池田啓一 (環境医学研), 内藤 久, 松本 孝 (昭和女子大), 岩井秀明, 高森健二 (医学部), 山倉文幸 (医学部) 第78回日本生化学大会, 日本生化学会誌 77(8), 3P-487, 2005

要旨: 3-ニトロチロシンは活性窒素種の生化学的マーカーに使われている。その他のマーカーの可能性として, 6-ニトロトリプトファン残基があるので, その抗体の精製と特異性について報告した。

6. 6-ニトロトリプトファン残基特異的抗体の精製とそのパーオキシナイトライト処理 PC12 細胞への応用 連名者: 池田啓一 (環境医学研), 平岡行博 (松本歯科大学), 岩井秀明, 松本 孝 (昭和女子大), 信太直己, 高森健二 (環境医学研), 山倉文幸 (医学部) 日本トリプトファン研究会第28回学術集会 (愛知) 講演要旨集 p23, 2005年12月3~4日

要旨: 生体内において, 炎症などの一酸化窒素とスーパーオキシドラジカルが同時発生する状態下では, それから生じた活性窒素種によりタンパク質のチロシン残基をはじめとした種々の生体物質がニトロ化を受けることが知られている。6-ニトロトリプトファン残基特異的抗体の精製とそれを用いたパーオキシナイトライト処理をした PC-12細胞での 6-NO₂Trp 含有タンパク質の検出について報告した。

水野 基樹

【論文・学会発表・Proceedings】

「組織経済学理論による経営戦略へのマクロ組織論的アプローチ—事例報告: 富士ゼロックス株式会社—」研究者: 水野基樹 スポーツ健康科学研究, 第9号, 2005年3月, 21-32頁。

本稿では, 情報技術化の牽引役を果たしている富士ゼロックス株式会社を取り上げ, 経営戦略の展開について論及した。まず, 設立の経緯を概観して, 同社海老名事業所で展開されている戦略とその意義について, 組織経済学における取引費用理論とエージェンシー理論を用いて理論的考察を生産戦略と組織戦略という分析視角から行った。経営環境が厳しさを増す昨今, 企業は競争優位性を構築するための経営戦略を多面的に発揮しなくてはならない。富士ゼロックスの柔軟で弾力的な組織的対応

がひとつのモデルケースであると論じた。

「高校生における逸脱行動と共感性および暴力肯定観との関連」研究者：田中純夫，水野基樹，今野亮，山田泰行，杉浦幸，菊地奈美 スポーツ健康科学研究，第9号，2005年3月，57-62頁。

近年における非行少年と一般少年のボーダレス化と犯行の非社会性の増大という観点に立脚し，現代高校生の逸脱行動経験を日常行動の延長線上で捉え，彼らの意識側面を重層的に探ることから逸脱行動の生起に関わる要因を明らかにした。

「キャリア移行におけるVリーガーの心理的プロセスに関する実証的研究—役割卒業理論の枠組みを用いたキャリア観からのアプローチ—」研究者：水野基樹，山田泰行，遠藤俊郎，田中純夫，菊地奈美，杉浦幸，濱野光之 バレーボール研究，Vol. 7, No. 1, 2005年3月，96頁。

スポーツ選手は，怪我や身体的な衰えなどにより，常に引退と隣り合わせの環境下にあり，必然的にビジネスパーソンと比較すると早期に第二の人生（セカンドキャリア）を迎えることになる。そこで本研究では，スポーツ選手のなかでも，とりわけVリーガーのキャリア移行に伴う心理的プロセスを探った。結論として，Vリーガーのセカンドキャリアを支援する際には，「入団動機」，「雇用形態」，「結婚歴」の3要因を考慮しながら，選手を個別的にマネジメントする必要があるとした。また，今後の産業界の転職のメカニズムを探る上で，スポーツ選手のキャリア研究は有効であることを提言した。

「競技経験年数に着目した運動選手のコーピングに関する研究—バレーボールを中心的視座に据えて—」研究者：山田泰行，田中純夫，杉浦幸，遠藤俊郎，広沢正孝，水野基樹 バレーボール研究，Vol. 7, No. 1, 2005年3月，89頁。

競技経験年数の違いから運動選手が用いるストレス・コーピングについて比較し，経験豊富な選手は抑うつ症状の抑制に効果的なコーピングを採用していることに関して，大学生バレーボール選手を対象に実証を試みた。結果として，経験年数が多い群よりも中程度の群が，抑うつの抑制と関連するコーピングを最も多く用いていることが確認された。また，新入部員にバーンアウト傾向が多く見られた。よって，バレーボール指導者は，未熟な選手や多様なコーピングが採用できない選手に対し

て，柔軟なコーピング・スキルが習得できるよう配慮することが重要であると指摘した。

「救急救命士のモチベーションと職務ストレスに関する研究」研究者：水野基樹，山田泰行，石井杏奈，水野有希 日本人間工学会誌，第41巻特別号，2005年6月，220-221頁。

救急救命士のモチベーション発生要因としての職務ストレスと健康状態に焦点を当て，両者に影響を及ぼす要因を共分散構造分析の結果に基づいて考察を行った。結果として，とりわけ「時間・ゆとり」潜在因子が，ストレスの抑制要因として影響していることが確認された。よって，夜勤交代制勤務や休憩時間帯および有給休暇取得などへの整備が望まれる。また，健康状態に関しては，職場における適切な相談相手の存在が，健康状態を促進する要因として確認された。そこで，良好な人間関係の構築が必要であることを主張した。

「フィットネスクラブ従業員のパーソナリティとキャリア成熟—ローカス・オブ・コントロール尺度を援用して—」研究者：佐藤亮，一寸木芳法，水野基樹 日本人間工学会関東部会第35回大会卒研発表会講演集，2005年10月，3-4頁。

成長産業のひとつであるフィットネス業界を対象にパーソナリティとキャリア成熟の関連についての調査を行った。フィットネスクラブでは，高い専門性を要求される仕事でありながら，そのほとんどが非正規雇用者である。よって，雇用形態の違いを考慮しつつ，①関心性，②自律性，③計画性，の3側面からの分析を行った。

「フィットネスクラブ従業員を対象にしたパーソナリティとストレスに関する研究」研究者：一寸木芳法，佐藤亮，水野基樹 日本人間工学会関東部会第35回大会卒研発表会講演集，2005年10月，45-46頁。

企業と従業員とのミスマッチが叫ばれるなか，フィットネスクラブにおいて，パーソナリティとストレスの関係を調査した。従業員の職務に対する向き不向きが，ストレスにいかに関係を及ぼすのか。Big Five尺度によって性格特性を5つに分類し，ストレスとの関係性を明らかにした。

「雇用形態がセカンドキャリア意識に及ぼす影響—男子Vリーガーへの実証研究の結果から—」研究者：水野基樹，遠藤俊郎，山田泰行 日本スポーツ心理学会第

32回大会研究発表抄録集, 2005年9月, 168-169頁.

Vリーガーにおけるセカンドキャリア意識に関して、雇用形態の相違（正社員群と非正社員群）に着目して比較考察を行った。結果として、①Vリーグ入団前の引退後のセカンドキャリアプラン、②入団前における引退後のセカンドキャリア不安、という2つの潜在因子が確認された。よって、Vリーガーがチーム（企業）とどのような雇用契約を締結しているのかを個別的にマネジメントする必要があることを明らかにした。そのため、チームとしては、選手の個別データ管理を徹底し、まずは現役時代を安心して過ごすことができる環境の整備が急務であるとした。

「スポーツ選手のキャリアトランジションに対する経営学的接近」 研究者：水野基樹 日本スポーツ心理学会第32回大会研究発表抄録集, 2005年9月, 8-9頁.

学会企画シンポジウム「スポーツ選手のキャリア教育—実践現場からの提言—」でのシンポジストを務め、スポーツ選手のキャリアに関しての報告を行った。特に、2004年に実施した男子Vリーガーへの調査結果を踏まえ、経営学におけるキャリアトランジションという鍵概念から統合的視点を提供することを試みた。主な提言内容としては、①キャリアデザインとキャリアドリフトを意識する、②キャリアデザインと競技パフォーマンスは有意に相関する、③キャリア形成のためにタスク学習と人的学習のバランスを図る、④バウンダリーレス・キャリアへ意識を転換する、⑤社会的ロールモデルとしての役割期待を受容する、などである。

「生徒の対人攻撃場面における認知とコーピングスタイル」 研究者：田中純夫、水野基樹、山田泰行、杉浦幸、菊地奈美、今野 亮 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 2005年9月, 250頁.

児童生徒の問題行動の中心が対人攻撃行動であるという視点から、自己統制の困難な思春期における攻撃性を、攻撃行動の機能的側面や認知的決定過程から解明するFAS尺度を再構成して把握した。さらに、本指標が実際の生徒のけんかや対立の発生をどのように説明できるか、またストレス・コーピングの方法や共感性とどのように関連するのかを検討した。特に、ストレス・コーピングの因子分析の結果では5因子が抽出され、また認知的共感性では2因子が抽出された。

「相互理解のためのエクササイズを利用したチームビ

ルディングの一事例—中高一貫校女子バスケットボール部を対象として—」 研究者：菊地奈美、渡辺智綱、芹澤啓美、中島宣行、水野基樹 日本体育学会第56回大会研究発表予稿集, 2005年11月, 205頁.

中高一貫校に通う女子バスケットボール部員を対象に、チームビルディングの一環としてメンバー同士の相互理解を目的としたエクササイズを導入し、メンバー同士の感情の動きや態度変容に関する調査を行った。部員たちは感情や意思をなかなか表現することができず、セッションでは、消極的な部員同士の関わり方を強く反映した態度や言葉が見られた。試合中に選手のやる気がなくなるということやモチベーションの大きな違いも、試合や練習に対する統制感や効力感を持っていないことが大きく影響しているのではないだろうかと推察された。

A Human Resource Development Approach on Motivation and Work Stress in Paramedics Authors: Motoki MIZUNO, Yasuyuki YAMADA, Anna ISHII, Sumio TANAKA *Book of Abstracts of the 13th International Congress on Occupational Health Services* (国際産業保健学会), December 2006, p121.

Recently, little approach has been made to motivation, job satisfaction and work stress for paramedics in Japan. Therefore, This research examined the mental stress conditions on Japanese paramedics in consideration of the motivation and working conditions. In the few decades, several health problems have allegedly been associated with physical working conditions. A great concern has been raised in the business organization and particularly among factory workers. In the near future, much attention should be paid to medical staff, especially in paramedics who play important roles in medical scenes.

【報告書】

『Vリーガーのセカンドキャリア 調査報告書』 監修：遠藤俊郎 編集：水野基樹、新藤莉江 順天堂大学スポーツ経営組織学研究室, 2005年3月15日

本調査では、Vリーグにおけるキャリアサポート体制と選手のセカンドキャリア意識を調査していくことで、キャリア移行に伴う心理的プロセスを探ることを主な目的とした。そして、現役期間中における充実した選手生活と引退後の安定した生活を獲得するために、チームサイドは今後どのようなことに着目すべきかを明らかにした。報告書では、①産業界の再就職支援（アウトプ

レースメント)と②転職や離職の心理的プロセス、という大きく焦点を2つに絞って作成された。

【その他】

「新しい働き方を探る(12)―キャリア・カウンセリング―」『労働の科学』労働科学研究所, 第60巻第1号, 52頁, 2005年。

近年の雇用問題への対策の一環として, 産業界ではキャリア・カウンセリングが注目を浴びている。従来, 学校教育現場における進路(職業)指導の際に用いられてきた手法であるが, 企業組織の場で適用され始めているのである。このような背景には, 若者のフリーターや無職業者, ミドル世代の転職や長期失業などが社会問題化しているということが挙げられよう。個人々がキャリア形成について考えるということは, 同時に様々な精神的な問題を抱えて思い悩むことでもある。したがって, こうした精神的または心理的問題を解決することがキャリア・カウンセリングの重要なテーマであり, 今後ますます重要となってくることを論じた。

「新しい働き方を探る(13)―インディペンデント・コントラクター―」『労働の科学』労働科学研究所, 第60巻第3号, 55頁, 2005年。

近年の就業形態の多様化に伴い, インディペンデント・コントラクター(IC)という新しい働き方が芽生えてきた。ICとは, 独立業務請負人であり, サラリーマンでも起業家でもない, フリーエージェントとしての働き方である。米国ではすでに900万人近いICが活躍しており, 日本においても外部人材を有効活用するためのひとつの手段として, ICという働き方が拡大するといわれている。企業側から考えると, いくつかの問題点はあるものの, 専門性の高い領域にコミットメントした上で業務を遂行するICを活用することにより, 確実にプロジェクトを成功に導き, かつコスト面でも高いメリットがあることを述べた。

「新しい働き方を探る(14)―キャリア・アンカー―」『労働の科学』労働科学研究所, 第60巻第5号, 51頁, 2005年。

昨今の従業員におけるキャリア意識の変化を受けて, キャリア・アンカー概念が注目されている。キャリア・アンカーとは, 個人の職業に対する動機, 欲求, 価値観, 能力などを統合した概念である。具体的には, ①経営管理志向, ②専門志向, ③安定志向, ④自律志向, ⑤

起業家志向, の5つに類型化でき, 職業上の重要な意思決定を行う際の錨(係留点)として機能するとされる。従業員個人はキャリア・アンカーを認識することで, 自己の職業適性を判断することが可能になる。一方, 企業側にとっても, 人材マネジメント戦略における多様な目的にキャリア・アンカーを活用することができるなど, 本概念の有効性を指摘した。

「新しい働き方を探る(15)―パワー・マネジメント―」『労働の科学』労働科学研究所, 第60巻第7号, 54頁, 2005年。

現代はストレス社会であるといわれている。そこで, ストレスの源泉のひとつである職場における人間関係に対しては, 格段の注意を払う必要があることは間違いない。そこで近年, 組織のリーダーは, 部下に対してどのようなパワーを行使し, 組織全体をマネジメントすべきかという研究が精力的に行われている。一般的に行行為者(O)が行行為者(P)に対して行使するパワーは, ①報酬パワー, ②強制パワー, ③正当パワー, ④準拠パワー, ⑤専門パワー, ⑥情報パワー, に大きく分類される。今後は, リーダーだけに限らず, どのようなパワーを, どういうタイミングで行使する, あるいは受け入れる必要があるのかを考えるべきであることを論じた。

「新しい働き方を探る(16)―ワーク・ファミリー・コンフリクト―」『労働の科学』労働科学研究所, 第60巻第9号, 54頁, 2005年。

従来, 女性の就業の在り方とは無関係に, 女性が家族の責任を遂行してきた。女性のキャリア発達においては, 確実にマイナスの影響を及ぼしてきたといえよう。そこで近年, ワーク・ファミリー・コンフリクトという概念が脚光を浴びている。ワーク・ファミリー・コンフリクトとは, 「ある個人の仕事と家族生活領域における役割要請が, いくつかの側面で互いに両立しないような役割間葛藤の一形態」である。具体的には, ①時間に基づく葛藤, ②ストレス反応に基づく葛藤, ③行動に基づく葛藤, の3つの形態があるとされている。今後は, トップ主導で男女問わず従業員個人の家族生活考慮した, 新しい組織文化を構築することであることを論じた。

「新しい働き方を探る(17)―インプレッション・マネジメント―」『労働の科学』労働科学研究所, 第60巻第11号, 53頁, 2005年。

組織において, 人間は他者からの評価に非常に大きな

関心を持っている。そこで、他者の自分に対する印象をコントロールしようとするプロセスである、インプレッション・マネジメントという分野が組織行動学で誕生した。自分が他者へ与える印象をマネジメントしようとする技法である。具体的な技法には、①自己描写、②同調、③弁明、④謝罪、⑤手柄の主張、⑥お世辞、⑦好意、の7つがあるとされている。自己のプレゼンテーションは、職務を遂行する上で必要なスキルである。今後は、ビジネス交渉を有利に進めるために、インプレッション・マネジメントを考慮し、適切に自己を確立するべきであると提案した。

菅波 盛雄

論文

A Comparative Study of Judo Competitions Using Hantei and Golden Score Systems, Research Journal of Budo, Vol. 38 No. 1 July, 2005. pp. 1-12. Authors: Morio SUGANAMI, Hitoshi SAITO (Kokushikan University), Nobuyoshi HIROSE, Mitsuru NAKAMURA, Hironori HAYASHI (Meiji University of Oriental Medicine), Katsuyuki MASUCHI (Toin University of Yokohama)

This study analyzes the matches that ended in tied scores at the end of regular match time which took place at 4 IJF championship tournaments held in the 4-year period between 2000 and 2003 and were conducted under the two different systems. With the introduction of the GS system, the incidence of matches ending in a tie score at the end of regular match time decreased. Also, there was a tendency to control the overall times of matches, and problems relating to extended playing time were thought to be within reasonable limits. With the change to the GS system, there was a tendency toward the winning of matches based on the awarding of points rather than on penalties, and so these changes were generally thought to be effective in supporting greater objectivity in deciding the winners of matches.

論文

柔道選手における下肢トレーニングの効果に関する研究：菅波盛雄，桜庭景植，廣瀬伸良，中村 充，石川拓次，順天堂大学スポーツ健康科学研究，第9号，1-10，2005.3

柔道選手における膝関節周囲筋の筋力特性および7週

間の下肢トレーニングが筋力と競技力に与える影響について検討した。その結果、膝関節周囲筋筋力の向上には効果がみられ試合内容においては、片脚支持による足技の施技数に増加が確認された。

論文

関東地方の皮膚科診療施設における *Trichophyton tonsurans* 感染症の発生状況に関するアンケート調査：比留間政太郎，白木祐美，二瓶 望，廣瀬伸良，菅波盛雄，日本医真菌誌 46巻2号93-97. 2005
“廣瀬伸良の項参照”

論文

柔道選手における *T. Tonsurans* 感染症の現状と対策：講道館柔道科学研究紀要第十輯 87-97. 2005
“廣瀬伸良の項参照”

濱野 光之

キャリア移行におけるVリーガーの心理的プロセスに関する実証的研究～役割卒業理論の枠組みを用いたキャリア観からのアプローチ～：水野基樹，遠藤俊郎，田中純夫，山田泰行，杉浦 幸，菊地奈美，濱野光之，梅北精幸 バレーボール学会第10回記念大会プログラム・抄録集，40，2005.3

Vリーガーを対象として、キャリア移行に伴う心理的プロセスを解明にすることを目的とした。その結果、引退後のプランを有する選手は引退後の不安が低い、チーム内で新たな役割を創造しようとするのが選手の競技モチベーションの減少に対する抑制要因として作用する傾向があるということが明らかになった。

レシーブを安定させるための効果的な練習方法 バレーボール学会編 バレーボール100Q入魂，35，日本文化出版，2005，5

レシーブを安定させるための効果的な練習方法について紹介した。

飯嶋 正博

①不器用な子どもの運動指導35 リズム運動その3—著者：飯嶋正博 発達教育 24(2) 14-15 2005.1

養護学校などで実践されているリズム運動を構成要素から分析し、指導に活かす動きを解説した。空間的要素

(手足の方向, 遠近, アクセント)を意識した動きづくりが紹介されている。

②不器用な子どもの運動指導36 —リズム運動その4—

著者: 飯嶋正博 発達教育 24(3) 14-15 2005.2

養護学校などで実践されているリズム運動を構成要素から分析し, 指導に活かす動きを解説した。人間の要素(模倣, 対応,)、全身, 手足の協調性運動を意識した動きづくりが紹介されている。

③不器用な子どもの運動指導37 —ボール運動その1—

著者: 飯嶋正博 発達教育 24(4) 14-15 2005.3

ボール運動を単に投げる, 蹴る, 打つ, 捕るに限らず, ボールを扱うさまざまな動きを取り上げて, ボール運動の上達が促進する方法を解説した。まず初めに, ボールと触れ合うことの重要性を意識する動きづくりが紹介されている。

④ダウン症ハンドブック 池田由紀江監修 菅野・玉井・橋本編 共著: 飯嶋正博, 田中新正, 他48名 第5章「5運動機能促進プログラム」97-100 2005.3

ダウン症について, 最新の知見から総合的にまとめられた本である。ダウン症児の運動機能を促進するプログラムについて, その定義・意味, 具体的な支援・指導の方法について, その概略を解説したものである。

⑤養護学校教員養成の現状と課題 共著: 中村勝二, 飯嶋正博 スポーツ健康科学研究(順天堂大学紀要) 9 41-47 2005.3

順天堂大学を中心に, 全国の養護学校教員養成の現状を調査し, 特別支援教育体制へと移行する中での課題を分析した。主に, 教員の質の向上や専門性の確保に関して懸念され, 本学において時代のニーズに応じたカリキュラムの改善が必要であることが示唆された。

⑥高校生スポーツ選手の身体意識—自己コントロール法における温感と冷感に着目して— 共著: 澁谷智久, 飯嶋正博 スポーツ健康科学研究(順天堂大学紀要) 9 69-72 2005.3

メンタルトレーニングとして用いられる自己コントロール法の中で「温感・冷感」を手がかりに, 高校生スポーツ選手が自分の身体にどのような身体意識を持っているかを調査した。その結果, 温感・冷感の出現の仕方は, 選手の競技種目, 内的注意集中状態の違い, 受傷体

験によって影響されていることが示唆された。

⑦不器用な子どもの運動指導38 —ボール運動その2—

著者: 飯嶋正博 発達教育 24(6) 14-15 2005.4

ボールを扱うさまざまな動きを取り上げて, ボール運動の上達が促進する方法を解説した。動きの中心をボールに置くか, 自分の身体に置くかによる動きの違い, ボールを受け取ること, 渡すことを意識する動きづくりが紹介されている。

⑧不器用な子どもの運動指導39 —ボール運動その3—

著者: 飯嶋正博 発達教育 24(7) 14-15 2005.5

ボールを扱うさまざまな動きを取り上げて, ボール運動の上達が促進する方法を解説した。放したボールは返ってくることを, 床, 壁, 傾斜を利用してバウンド, クッションボールの投げる, 捕ることを意識する動きづくりが紹介されている。

⑨不器用な子どもの運動指導40 —風船を用いた動きづくり— 著者: 飯嶋正博 発達教育 24(8) 14-15 2005.6

ボールの代わりによく用いられるゴム風船を用いた捕球, リフティング, タオルと一緒に用いる打つ動き, 二人で協力して風船をコントロールする動きを通しての動きづくりが紹介されている。

⑩不器用な子どもの動きづくり 著者: 飯嶋正博 かもがわ出版 2005.7

月刊誌「発達教育」で連載した過去2年半分をまとめ, 新たに動きの見立てなどを加筆した本である。障害を持つ子のみならず, 幼児や広く不器用な子どもたちの動きづくりに役立つ水泳, 縄跳び, 鉄棒など多くの実践が紹介されている。

⑪不器用な子どもの運動指導41 —書字その1— 著者: 飯嶋正博 発達教育 24(9) 14-15 2005.7

日常生活や教科学習に必要な動きとして書字の動きを取り上げ, その上達を図る動きづくりを解説した。ペン・ペン書字から渦巻きぐるぐる書字までの書字慣れや鉛筆を持つ, 削る動きが紹介されている。

⑫実践セミナー F. 子どもの発達とその障害: 発達心理学とその応用 発達協会監修 共著: 飯嶋正博, 平林伸一ら5名 「運動指導の実際とは—発達の評価と課題設定—」 F-19-F-22 2005.7

子どもの発達とその障害,さらにはその対処法を発達心理学の側面から解説し,さまざまな実践を紹介するセミナーのテキストである. コミュニケーションや遊びなどが紹介されているが, 著者は運動面の発達とそれに対する具体的な支援の方法などを解説した.

⑬不器用な子どもの運動指導42 —書字その2— 著者: 飯嶋正博 発達教育 24(10) 14-15 2005.8

書字の上達を図るために有効な実践として, 枠組みに沿って書く, 折り紙書き, さらになぞり書きではなく, 子どもが自分で書き順を探してゆく, 迷路(もの・文字)書きが紹介されている.

⑭メンタルトレーニングへの三角イメージの応用 共著: 杉浦幸, 飯嶋正博, 中島宣行 日本スポーツ心理学会第32回大会研究発表抄録集 80-81 2005.9

三角形をイメージとして想起するとき, 場面(競技前, 競技中の危機状況, 成功した終了後)によって, どのように変化するかを検討することによって, 短期間に簡単に用いられるメンタルトレーニング(イメージ法)の可能性を分析した. 86%の被験者で場面によって, 変化することが認められ, 活用できることが示唆された.

⑮「不器用さ」への理解と対応—運動指導を通じて— 著者: 飯嶋正博 発達協会実技講座テキスト3 1-13 2005.9

不器用な子どもたちへの動きづくりを実技を交えて学ぶ研修会のテキストである. 不器用さの原因, 指導上の留意点, 実際の動きづくりの紹介している.

⑯不器用な子どもの運動指導43 —ペットボトルを用いた動きづくり1— 著者: 飯嶋正博 発達教育 24(11) 14-15 2005.9

水泳指導において, アクアポールを用いた浮く動きづくりの実践とリペットバトンというペットボトルと連結できるものを活かして, ペットボトルをフロート(浮き具), ラケット, バットとして使う水上球技の実践を紹介している.

⑰不器用な子どもの運動指導44 —ペットボトルを用いた動きづくり2— 著者: 飯嶋正博 発達教育 24(12) 14-15 2005.10

陸上で, ペットボトルとリペットバトンを連結して行える動きづくりの実践を紹介している. バトン体操, ティボール, 様々なラケットとして, ボールリングや輪投

げ, ハードルなど.

⑱不器用な子どもの運動指導45 —指先の細かな動きづくり— 著者: 飯嶋正博 発達教育 24(13) 14-15 2005.11

指先の力加減がうまくできない, 指使いが不器用な子どものための細かな指先の動きづくりとして, ストローの蛇腹の部分, 下敷き, トランプカード, ティッシュや綾取りを用いたものを紹介している.

⑲メンタルトレーニングが運動選手の重心動揺に及ぼす影響—スポーツ動作法を用いて— 共著: 杉浦幸, 山田泰行, 飯嶋正博, 中島宣行, 佐久間淳, 中村恭子 日本体育学会第56回大会 予稿集 210 2005.11

動作法を用いたメンタルトレーニングを通して, 運動選手が重心動揺を調整する過程を分析, その効果を検討した. 2ヶ月, 8セッションのトレーニングを経て, 有意に重心動揺が安定し, メンタルトレーニングとしての効果が認められた.

⑳メンタルトレーニングへの動作法の適用—身体意識の再確認— 共著: 飯嶋正博, 山田泰行, 杉浦幸, 菊池奈美, 中島宣行 日本体育学会第56回大会 予稿集 210 2005.11

メンタルトレーニングとして動作法を用いる際に, 主体的に身体の動きに意識をおくことの重要性を検討する目的で, 動きの体験の違いによる感じ方を比較検討した. 動きや身体へ注意を向けることが難しい動き, 身体部位が明らかになった.

㉑大学生競技者に対するメンタルトレーニングの実践—陸上ハードル選手の事例—共著: 山田泰行, 杉浦幸, 飯嶋正博, 中島宣行, 佐久間淳, 中村恭子 日本体育学会第56回大会 予稿集 210 2005. 11 F-19-F-22

陸上ハードル選手に対して, 3ヶ月間のメンタルトレーニングを実施した. スポーツ動作法を中心に構成されたプログラムによって, 心理的競技能力やモチベーションの向上が認められた. しかし, スポーツ障害によって競技成績の向上は確認できなかった.

㉒千葉県における心理リハビリテーション—地域支援とそのネットワークの構築—著者: 飯嶋正博 2005年日本リハビリテーション心理学会 発表論文集 36-37 2005.11

千葉県内で開催されている11箇所の動作法を用いた訓練会、相談会の実態を調査し、各会の独自性や会をつなぐ連絡会が構築しているネットワークの役割と問題点を明らかにした。

㊸不器用な子どもの運動指導46 —リズム運動その5—
著者：飯嶋正博 発達教育 25(1) 14-15 2005.12

以前に紹介したりズム運動をチェックリストを用いて、構成要素から分析し、具体的な動きづくりの指導に活かす実践を解説した。歩くという動きを上達の目的に合わせて、巧みな動きとすばやい動きに分けた動きづくりが紹介されている。

内藤 久士

著書

スポーツ医学研修ハンドブック：応用科目。日本体育協会監修。持久性トレーニング (pp31-36)。青木純一郎，内藤久士。文光堂，2004。持久性のトレーニングに関わる運動生理学的知見を解説した章を分担執筆した。

健康生活コーディネーター教本。ナップ，2005。千葉県戦略プロジェクト事業における健康生活コーディネーター育成研修カリキュラムのためのテキストとして、「個人の特性を考慮した運動指導のための基礎知識—高齢者のための運動論—」(2-18, pp1-6)を分担執筆した。

論文

Changes in protein kinase B (PKB/Akt) and calcineurin signaling during recovery in atrophied soleus muscle induced by unloading. Sugiura T, Abe N, Nagano M, Goto K, Sakuma K, Naito H, Yoshioka T, Powers SK. *Am. J. Physiol. (Regul Integr Comp Physiol)* 288: R1273-R1278, 2005. 廃用性筋萎縮からの回復時における細胞内シグナル伝達の変化を PKB/Akt およびカルシニューリンに着目しその働きを明らかにした。

血流制限下ラット骨格筋肥大における HSP72 の特異的発現。 徐守宇，内藤久士，高澤俊治，池田浩，黒澤尚。順天堂医学 51(2): 160-166, 2005。

血流制限下では代償性筋肥大が促進されることを明らかにし、そのメカニズムには HSP72 が関与していることを明らかにした。

専門誌・報告書等

平成十六年度体力・運動能力調査報告書。青木純一郎，内藤久士，その他体育局担当官4名：文部科学省スポーツ・青少年局2005。

クレアチン摂取は高齢者における低強度の筋力トレーニング効果を高める。 石崎聡之，高橋光平，宮原祐徹，内藤久士，形本静夫，佐野純子，水野杏一，青木純一郎。第20回明治安田生命研究助成論文集。健康医科学 20. 14-21. 2005。

国際（海外）学会発表

Effects of different levels of hypoxia on anaerobic energy release in trained athletes. Ogura Y, Katamoto S, Uchimaru J, Naito N, Aoki J. 52nd ACSM Annual Meeting (Nashville). 平成17年6月3日。Med. Sci. Sports Exerc. 37: S295, 2005。

Effect of proprioceptive neuromuscular facilitation stretching and static stretching on maximal voluntary contraction. Miyahara Y, Ogura Y, Naito N, Katamoto S, Aoki J. 52nd ACSM Annual Meeting (Nashville). 平成17年6月4日。Med. Sci. Sports Exerc. 37: S441, 2005。

Creatine supplementation in elderly subjects enhances the effects of low-intensity resistance training. Ishizaki S, Takahashi K, Miyahara Y, Naito H, Katamoto S, Inagaki M, Sano J, Mizuno K, Aoki J. 46th ICHPER SD (Istanbul) 平成17年11月8日。Proceeding, 2005。

Effect of intermittent normobaric hypoxia on plasma glutamine concentration in distance runners. Takahashi K, Uchimaru J, Ogura Y, Naito H, Aoki J. 13th CSEP Annual Meeting (Canada). 平成17年11月9日，Book of abstract, 2005。

Effect of Astaxanthin on the oxidative damage of DNA, protein and lipid peroxidation in young and old rats. Ohmori D, Iida Y, Shimada T, Naito H, Uchida K, Hosomi O, Ikeda K, Yamakura F, Tsukada M. PACIFICHEM 2005 (Honolulu). 平成17年12月20日 Book of abstract, 2005。

国内学会発表

Age-related differences in signal transduction during recovery in atrophied plantaris muscle induced by immobilization. Sugiura T, Goto K, Naito H, Yoshioka T.

第82回日本生理学会大会(仙台). 平成17年5月18日.
Jpn. J. Physiol. 55 (Suppl.) S119, 2005.

細胞内シグナル伝達系からみた萎縮筋の回復過程に及ぼす温熱刺激時間の影響. 杉浦崇夫, 後藤勝正, 内藤久士, 吉岡利忠. 第13回日本運動生理学会大会(東京)平成17年7月30日. Adv. Exerc. Sports Physiol. 11(4): 149, 2005.

自発走トレーニングがラット骨格筋衛星細胞に及ぼす影響. 温熱刺激がDOMSの繰り返し効果に及ぼす影響. 黒坂光寿, 内藤久士, 小島敦, 後藤勝正. 第60回日本体力医学会大会(岡山県)平成17年9月24日. 体力科学 54(6): 459, 2005.

運動と休息の時間配分が異なる間欠的長時間運動が血中遊離脂肪酸濃度に及ぼす影響. 土井進, 形本静夫, 内藤久士. 第60回日本体力医学会大会(岡山県)平成17年9月23日. 体力科学 54(6): 521, 2005.

筋萎縮に対するアスタキサンチンの効果. 杉浦崇夫, 飯田義晴, 内藤久士, 大森大二郎, 後藤勝正, 吉岡利忠. 第60回日本体力医学会大会(岡山県)平成17年9月23日. 体力科学 54(6): 466, 2005.

温熱刺激がDOMSの繰り返し効果に及ぼす影響. 佐賀典生, 形本静夫, 内藤久士. 第60回日本体力医学会大会(岡山県)平成17年9月24日. 体力科学 54(6): 468, 2005.

クレアチン摂取が高齢者における低強度の筋力トレーニング効果に及ぼす影響. 石崎聡之, 高橋光平, 宮原祐徹, 内藤久士, 形本静夫, 稲垣 雅, 佐野純子, 水野杏一, 青木純一郎. 第60回日本体力医学会大会(岡山県)平成17年9月25日. 体力科学 54(6): 529, 2005.

Detection of 6-nitrotryptophan residues in proteins by immunoblot analysis. Ikeda K, Naito H, Matsumoto T, Iwai H, Takamori K, Yamakura F. 第78回日本生化学会大会(神戸)平成17年10月19日. 発表抄録集 951,

2005.

井上 忠夫

異なる気候条件下で暮らす女子高校生の「冷え性」と生活状況の検討 著者: 土屋 基, 鈴木勝彦, 井上忠夫, 樋口和洋¹⁾ 信州短期大学 民族衛生 71(5): 207-218, 2005.9

「冷え性」は生死に直接関わる障害でないために, 医学界では研究や治療に関してあまり関心の対象にされず, 定義や病態に関しては明確にされていない. ここでは女子高校生を対象に, この世代の「冷え性」の実態を把握し, 「冷え性」と生活背景との関係を実証データに基づいて明確にすることにより, 若年時から健康にとって好ましい生活を確立していくための資料を得ることを目的とした.

健康づくり運動教室の評価に関する検討 著者: 土屋基, 井上忠夫, 鈴木勝彦, 竹内敏康 第12回日本健康体力栄養学会講演抄録集 7, 2005.3

短期間に行った健康づくり運動教室の効果を検討すると共に, 教室終了後における自主的サークル活動に発展させるための資料を得ることを目とした.

高地滞在におけるエネルギー代謝と体組成の変化 著書: 鈴木勝彦, 土屋 基, 井上忠夫, 清水俊明¹⁾, 竹井謙之²⁾ ¹⁾順天堂医院小児科 ²⁾順天堂医院消化器内科学 順天堂医学 平成16年度順天堂大学学長特別プロジェクト研究成果抄録 51(3): 412-413, 2005

高地に滞在する本学のキャンプ実習におけるこれまでの各種測定の結果から, 体脂肪の利用が高まり体組成が変化することが予想された. 血中レプチン濃度の変化は最も鋭敏に反応し, 体脂肪の変化と対応していた. しかし, インピーダンス法による体組成の分析では, 明確な結果が得られなかったため, DEXによる全身体組成成分と, 安静時代謝エネルギーの測定による分析を行った.

Extended Bradley Terry Model with Multiple Covariates in Sensory Evaluation Tairai Mino, Tadao Inoue, Hideo Ono¹⁾; ¹⁾Meisei University Proceedings of 25th European Meeting of Statisticians, 464-465, 24-28 July 2005, Oslo

In the method of paired comparisons data are given as totals of panelists' preferences of an experimental object to

another one. While we often encounter situations in which experimental objects have measurements of physical and chemical characters such as weight, thickness, width, height and density. The information of the relationship between sensory ratings π and measurements as multiple covariates x may lead to more detailed sensory analysis. We proposed a model in which $\pi(x; \theta)$ is set as an exponential function model. Some asymptotic distributions concerning π and θ for testing hypotheses of those parameters are derived. The model is applied to the analysis of panelists' senses of weight to equal-weighted, different colored six kinds of textiles. The result indicates that the senses depend on brightness and chroma of the textiles.

鈴木 大地

著書

1. 健康とスポーツ 順天堂大学医学部編 2005年3月5日 学生社 「水泳と健康について」担当
2. 画像処理工学 谷口慶治・長谷博行編 2005年5月25日 共立出版「スイマーのフォームの分析について」担当
3. スイミングファステスト 高橋繁浩・鈴木大地監訳 2005年12月22日 ベースボールマガジン社

論文

1. Psychological, behavioral and physiological characteristics associated with health of participants of water exercise programs: Comparison with participants of health events 投稿中 Daichi SUZUKI¹, Tsuyoshi MATSUBA², Yutaka INABA
2. 「グローバル・メディア・イベントとしてのスポーツ」—スポーツスターの『自己創造』に関するエスノグラフィ— 高橋利枝, 鈴木大地 順天堂大学スポーツ健康科学紀要

学会発表

1. 定期的な運動習慣や水中運動が健康づくりにおよぼす影響に関する研究 日本衛生学会 鈴木大地, 松葉剛, 稲葉 裕

新聞投稿

- 毎日新聞 4月22日朝刊スポーツ面「未来のメダリスト」親子2代で日本代表となり活躍している選手たちにつ

いて分析を行った。

- 毎日新聞 6月3日朝刊スポーツ面「ピラティスについて」

近年, 流行しているピラティスについて, アメリカ・カリフォルニア州でディプロマを持つアメリカ人トレーナー取材し, ピラティスの全貌, 将来性についてレポートした。

- 毎日新聞 7月8日朝刊スポーツ面「ハンガリーで剣道を指導する日本人」

ハンガリーで剣道を指導する日本人の実像に迫り, コーチングとは何かを論考した。

- 毎日新聞10月21日朝刊スポーツ面「世界のスポーツ界のためにできること」

国際オリンピック委員会副会長となった猪谷千春氏に今後の日本のスポーツ界の展望を聞いた。

- 毎日新聞12月16日朝刊スポーツ面「北京五輪にむけ, 変貌する北京」08年に五輪を控えた北京をレポートした。

取材・対談

鈴木大地の「水泳史に燦然と輝く名スイマー」スイミングマガジン ベースボールマガジン社

鈴木大地の「水泳史に燦然と輝く名スイマー」毎回往年の名スイマーをゲストに迎え, 競泳選手の資質とは何か? 大成するには何が必要か? どういったコーチングを受けてきたか? を焦点に当て話を聞くシリーズ。

- 第9回 山中 毅 2005年3月号 2004年3月1日発行
- 第10回 竹宇治聡子 2005年4月号 2005年4月発行
- 第11回 木原光知子 2005年6月号 2005年6月1日発行
- 第12回 浜口 喜博 2005年8月号 2005年8月1日発行
- 第13回 長沢 二郎 2005年11月号 2005年11月1日発行

野川 春夫

著書

1. 成功する顧客満足度の測り方
サイエンティスト社 2005年6月
翻訳者: 野川春夫, 瀬尾美貴

学術論文

1. 「ボウリングセンターにおける職務満足とホスピタリティ・マネジメントに関する研究」
生涯スポーツ学研究, Vol. 3, 2005.
共同研究者: 宮崎朋子
2. 「スポーツ事業におけるプロセス評価の試み—広域スポーツセンター育成モデル事業を例として—」

生涯スポーツ学研究, Vol. 3, 2005.

共同研究者: 桜井 学

口頭発表

1. 「ボウリングビジネスにおけるホスピタリティ・プログラムの開発」
発表者: 宮崎朋子・野川春夫
第7回日本生涯スポーツ学会, 長崎県・ハウステンボス, 2005年10月29日
2. 「レッズファン・サポーター=〈レッズランド〉会員の図式は可能か?」
発表者: 市川朋香・野川春夫
第7回日本生涯スポーツ学会, 長崎県・ハウステンボス, 2005年10月29日
3. 「広域スポーツセンターをどのようにマネジメントするか? ~Y 広域スポーツセンターの事例紹介~」
発表者: 渡辺泰弘・野川春夫・松本耕二
第7回日本生涯スポーツ学会, 長崎県・ハウステンボス, 2005年10月29日
4. 「今, ゴルフギャラリーが熱い!」
発表者: 野川春夫
第7回日本生涯スポーツ学会, 長崎県・ハウステンボス, 2005年10月29日
5. 「生涯スポーツ・イベントへの継続的な参加をどう説明するか? ~社会的交換理論の援用にむけて~」
発表者: 岡安 功・野川春夫
第7回日本生涯スポーツ学会, 長崎県・ハウステンボス, 2005年10月29日
6. 「スポーツイベント市場のポテンシャルマーケットとしての団塊世代~サッカー愛好者に着目して~」
発表者: 市川朋香・高橋季絵・太田あや子・野川春夫
第56回日本体育学会, 筑波大学, 2005年11月25日
7. 「団塊世代のツーリズム・スタイルに関する研究~スポーツ・イベント参加者のツーリズム・ライフスタイルに着目して~」
岡安 功・太田あや子・野川春夫
第56回日本体育学会, 筑波大学, 2005年11月26日
8. 「団塊世代のボランティアズム」
渡辺泰弘・宮崎朋子・河原行雄・野川春夫
第56回日本体育学会, 筑波大学, 2005年11月26日
9. 「A Study of Female Football Spectators in Japan」
発表者: 市川朋香・瀬尾美貴・野川春夫
第3回 World Congress of Sociology of Sport, アルゼンチン, ブエノスアイレス, 2005年12月3日
10. 「Career Transition Patterns of Professional Football Players in Japan —Re-examination of Role-exit Model—」
発表者: 上代圭子・野川春夫・重野弘三郎
第3回 World Congress of Sociology of Sport, アルゼンチン, ブエノスアイレス, 2005年12月3日
11. 「Sport Stadiums in the City」
発表者: 高橋季絵・野川春夫
第3回 World Congress of Sociology of Sport, アルゼンチン, ブエノスアイレス, 2005年12月3日
12. 「Parasite Single Syndrome of Japanese Professional Football Players」
発表者: 野川春夫・上代圭子
第3回 World Congress of Sociology of Sport, アルゼンチン, ブエノスアイレス, 2005年12月3日